A. メルレルとの“対話的フィールドワーク”のエラボレーション
――“境界領域の智”への社会学的探求 (2)――

新　原　道　信

目　　次

1　はじめに――“対話的なフィールドワーク”の現在
2　過去のフィールドワークの“サルベージ”
3　2018 年 8 月 6 日サッサリでの対話
4　2019 年 3 月 17 日メリリャでのフィールドワーク
5　2019 年 3 月 18 日メリリャでのフィールドワーク
6　2019 年 3 月 23 日アルヘシラスでの対話
7　おわりに―― COVID-19 以降の人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークにむけて

私たちは，人間の知性が，抽象的な思考を生み出すことを知っている。しかし，それと同時に，私たちの身体は，この惑星地球という生身の存在に深く根をおろしている。こうして私たちは，記憶をたくわえ，その記憶を何度も何度も練り直していく――家族についての記憶，前の世代の記憶，どんな家に住んでいたのか，故郷はどんなところだったのか，どんな季候のどんな場所で育ってきたのか，少年時代，青年時代，青春をどのように過ごしてきたのか，誰と出会い，誰を愛し，誰を憎んだのか。どんな空の下で人生の意味を学んだのか，人生の方向を定める星座をどのようにつくったのか。どんな森，荒野，山の頂，雪，河や海で私たちは出会い，自分を，他者を識ったのか。
私たちは，こうした追憶のフィルターとレンズによって，私たちのなかに深く根付いた生身の現実の意味を学び，問いを発する。複合し重合する私は，厳格に存在していたかのように見える「境界線」をあまり気にすることもなく，いまとなっては慣れ親しんだ境界の束をこえていく。そして，自らの旅の道行きで獲得した固有の見方に従いながら，いくつもの異境を越え，「厳格な境界線」の限界を抜け出ていく。たとえ「ノーマルではない」「違っている」「マイノリティだ」「不適応だ」と言われても，異境を旅する力とともに生きてゆく。
仮想の「正常さ」や「画一性」から見たらしっくりこない社会文化的な島々として，
たとえこの真剣なコンチェルトの試みが，トータルには理解されていないとしても，
より多くの人の耳に，この不協の多声が届くことを願いつつ。
「海と陸の“境界領域”――日本とサルデーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」
（Merler e Niihara 2011a = 2014: 86-87）より

1　はじめに――“対話的なフィールドワーク”の現在

本稿は，拙稿「A. メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み――“境界領域の智”への社会学的探求 (1)」（新原 2017a）の続編となる。ここでは，現代社会が直面する“「壁」の増殖（proliferation of ‘barrier’）”に対峙することを目的として，イタリアの知識人の“臨場・臨床の智（cumscientia ex klinikós, composite wisdom to facing and being with raw reality）”に着目した[1)]。そのなかでも，“境界領域の社会文化的な島々を生きるひと（gens insularis in cumfinis, people living in socio-cultural insularity of frontier/liminal territories）”が持つ“境界領域の智（cumscientia in cumfinis, the wisdom of frontier/liminal territories）”を体現する知識人[2)]の一人であるA. メルレル（Alberto Merler）の“背景（roots

and routes)”を辿り，その理論と方法の特徴を明らかにした。

メルレルは，イタリア・スイス・オーストリアと国境を接するアルプス山間地トレンティーノ＝アルト・アディジェ州の州都トレントに生まれ，ブラジル・サンパウロで幼少期・青年期を過ごした。南米を代表する社会学の巨人O. イアンニ（Octavio Ianni）のもとでサンパウロ大学大学院を修了，アフリカ・セネガルやヨーロッパなどで研究と大学教育・高等教育の経験を積み重ね，その後イタリアに「帰還」した。地中海の島サルデーニャのサッサリ大学でテニュア（終身雇用資格）を獲得，正教授（professore ordinario）となり，同地を“基点／起点（anchor points, punti d’appoggio)”として，研究組織FOIST/INTHUMの代表として，世界各地で〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を展開し，現在もサッサリに在住しながら，精力的な研究活動を継続している。

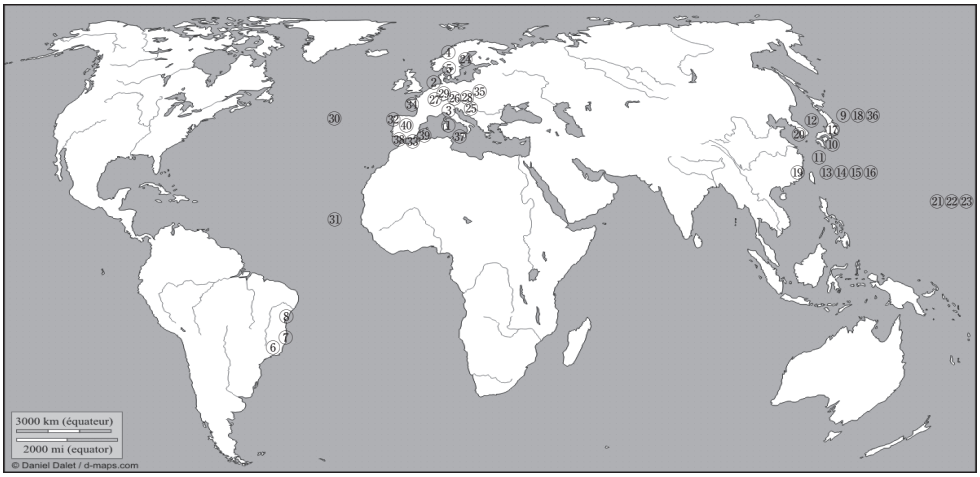
メルレルは，これまでの“方法としての旅（il viaggio come una epistemologia/metodologia)”のなかで，多様な社会的文脈や規範，複数の民や土地・歴史・宗教・生活観・倫理的価値観・死生観・経済観念・政治の感覚を“織り合わせて（intrecciare insieme, weave together)”きた。その“旅（explorations, esprorazione, itinerarium)”の途上で，“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale)”，すなわち，メタファーとしての“社会文化的な島々（isole socio-culturali)”から社会の“衝突・混交・混成・重合の歩み（percorso composito, composite route)”を見直す“島嶼社会論（visione della società insulare)”を“塑造・造形（shaping, dare forma)”してきた（新原2017a）[3]。

本稿では，メルレルの“島嶼社会論”の“背景”を念頭におきつつ，“智を身体化する（embedding/imprimere una “cumscientia” in corpus)”という観点から，メルレルが実際のフィールドで，どのように“思行（思い，志し，想いを馳せ，言葉にして，考えると同時に身体がうごいてしまっているという投企)”をしているのかを見ていきたい[4]。

筆者は，メルレルと1987年に出会ってから2019年までの32年間（2020年から2022年は，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19, Coronavirus Disease 2019)」によって，その歩みを一時停止せざるを得なくなっている），サルデーニャ（イタリア自治州），コルシカ（フランス），ケルン（ドイツ），エステルスンド・ストックホルム（スウェーデン），コペンハーゲン・ロスキレ（デンマーク），サンパウロ・リオデジャネイロ・エスピリトサント（ブラジル），川崎・鶴見，沖縄，北海道，香港・マカオ（中国への返還以前），済州島（韓国），リスボン（ポルトガル），アゾレス（ポルトガル自治行政区），カーボベルデ（カーボベルデ），トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地（イタリア・オーストリア・スイスの間国境地域），フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツァ（イタリア・オーストリア・スロヴェニアの間国境地域），トリエステからイストリア半島（イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域），ランペドゥーザ（アフリカからの難民問題に直面するチュニジア対岸のイタリア最南端の島），メリリャとセウタ（アフリカ北岸モロッコ領内のスペインの「飛び地」），ジブラルタル（スペイン領内のイギリスの「飛び地」），アルヘシラス（スペイン）など，国家の「中心」から見るなら“端／果て”とされるような地域，（メルレルと新原の理解では）“［テリトリーの］境界領域（frontier/liminal territories, zona di confine/territorio limitrofo)”の“深層／深淵”を「理解」するための“探究／探求”をしてきた[5]（地図①）。

メルレルとの“方法としての旅（il viaggio come una epistemologia/metodologia)”“対話的なフィールドワーク（dialogic Fieldwork, viaggio

地図①　メルレルとの“対話的なフィールドワーク”の軌跡



①サルデーニャ　②ケルン　③コルシカ　④エステルスンド　⑤ロスキレ　⑥サンパウロ　⑦リオデジャネイロ　⑧エスピリット・サント　⑨川崎・鶴見　⑩奄美　⑪沖縄　⑫対馬　⑬石垣・宮古島　⑭竹富　⑮西表島　⑯南北大東島　⑰周防大島　⑱神奈川県の多文化・多言語混成地区　⑲マカオ・香港　⑳済州島　㉑サイパン　㉒テニアン　㉓ロタ　㉔オーランド　㉕イストリア（イタリア・スロヴェニア・クロアチア）　㉖トレンティーノ＝アルト・アディジェ　㉗ヴァッレ・ダオスタ　㉘フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア　㉙アルプス山間地（スイス・イタリア・ドイツ・オーストリア）　㉚アゾレス　㉛カーボベルデ　㉜リスボン　㉝リーフ地方（モロッコ）　㉞トリエステ　㉟ゴリツィア　㊱立川・砂川　㊲ランペドゥーザ　㊳セウタ　㊴メリリャ　㊵ジブラルタル

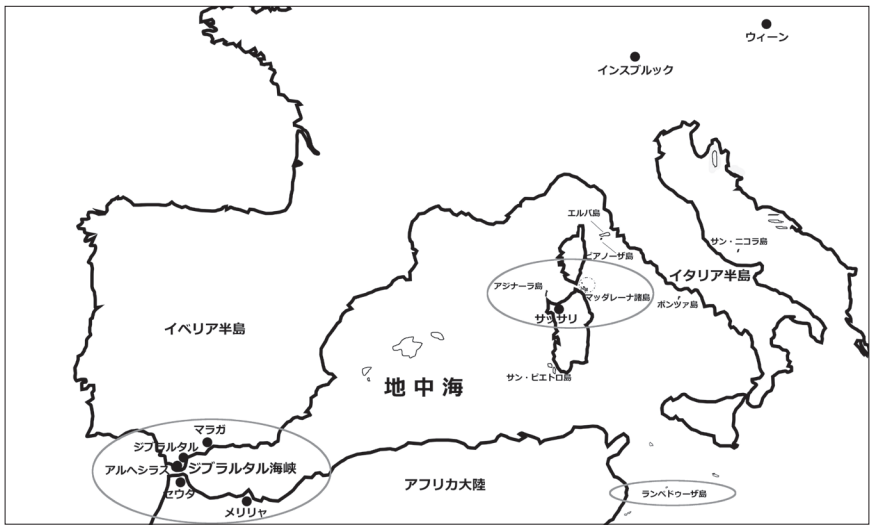
dialogando）”は，国家・資本・情報などの理解を「一時保留」にして，空間的・時間的な“境界領域”で“臨場・臨床の智”を探求し，ここから，惑星地球をひとつのコミュニティとするような“共創・共成（co-creating/co-becoming）”“共存・共在の智（saggezza di convivenza, wisdom of coexistence）”を構想するものであった[6]。

ひとつは，「大航海時代」（すなわち，ヨーロッパが非ヨーロッパ世界を「発見」し，「下位」に位置づけていくコロニアリズムの時代）以前の移動と定住の諸過程，“衝突・混交・混成・重合の歩み”のなかに埋め込まれていた“多系／多茎の可能性（the possible routes to the various alternative systems）”を「掘り起こす」試みである[7]。

いまひとつは，“不断／普段の営み（movimenti continui e quotidiani）”のデイリーワークである〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉として，日本国内では湘南地区と立川・砂川地区，イタリアではサッサリのサンタ・マリア・ディ・ピサ地区におけるコミュニティ研究と療法的関係性の構築を含めた参与的調査研究をすすめてきた（ここでは，「基地・兵舎（跡と建設予定地）」「引き揚げ」「移民・難民」などが現実理解の重要な“基点／起点”となっている）[8]。

“旅をして，比較／対話し，ともに考え／自らうごいていく（viaggiare, confrontarsi/dialogare, pensare insieme/agire autonomamente）”という試みを通じて，異質性を含み混んだ島々（isole composite）としてヨーロッパやアジア社会を構想してきたのであるが（Merler 2003a = 2004; 2004 = 2006）（Merler e Niihara: 2011a = 2014; 2011b）（新原 2004），その一方で，現実のグローバル化は，この“願望と企図”とは逆に，「壁」の増殖へと向かっているという理解が同時にあった。ここから 2018 年から 2019 年にかけては，ラ

地図②　2018 年～ 2019 年のフィールドワーク



＊ これ以降の地図は大谷晃氏の協力で作成したものである。

ンペドゥーザ[9]，石垣・宮古[10]，セウタ，メリリャ，ジブラルタルなどでのフィールドワークを行ってきた[11]（地図②）。

ランペドゥーザと同じく，北アフリカのみならずサブサハラ（サハラ砂漠以南のアフリカ），さらにはシリアやイラクなどからの難民にとって「ヨーロッパへの玄関口」となっているメリリャとセウタでは，とりわけ 2000 年以降，有刺鉄線や金網の強化，レーダー，監視カメラ，マイク，センサーの設置，治安警備隊（guardia civil）の増強などが行われている。しかし，メルレルと新原は，歴史の一局面（短期の「事件」「出来事」）としての「移民・難民の流入」のみならず，メリリャやセウタのような“境界領域”での“異質性の衝突・混交・混成・重合（collisione, mescolanza, ibridazione e polimerizzazione dell'eterogeneità）”に着目していた。

メルレルと行ってきた“旅する社会学（sociologia viaggiando, voyaging sociology）”の〈メソドロジー／メソッズ〉である“対話的フィールドワーク（dialogic Fieldwork, viaggio dialogando）”は，“対話的／対位的なフィールドワーク（dialogic and poly/dis-phonical Fieldwork）”でもあり，人間と社会のうごきをとらえる“うごきの比較学（“Comparatology” of becomings, “Comparatologia” di metamorfosi）”としての性格を持つ。そこでは，① 個別性・固有性を持った場所における“地域社会（region and community）”のコミュニティ研究を基本としながら，② 特定のコミュニティの背後にある“地域社会／地域／地（regions and communities/territory/earth, regioni e comunità/territorio/terra）”を全景把握する試みとしての“地域学（Terranology, terranologia）”，そして ③“比較学（Comparatology）”[12]を内包していた。

2　過去のフィールドワークの“サルベージ”

しかしながら，“うごきの比較学”による人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークは，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19, Coronavirus Disease 2019）」のもとで，その意味を根本から問い直す必要に迫られた。2021 年の論稿「“フィールドに出られないフィールドワー

ク”という経験――惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(2)」（新原 2021a）においては，“「壁」の増殖”に加えて，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」が感染拡大・滞留するなかでの人間と社会の“うごき”を新たな課題として設定せざるを得なかった。“「壁」の増殖”と“パンデミック”[13]は，惑星地球規模となった社会の至るところで，偏差と隔絶をともないつつ，「恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利」（憲法前文）から疎外された“受難者／受難民”を生み出し続けている。

このような“うごき”を捉えようとするとき，「地球の裏側」へも足を伸ばすフィールドワークを可能としていた現代社会とそこでの調査研究者の在り方（ways of being）も問い直されざるを得ない。そのため，2021 年の論稿「“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験――惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(2)」（新原 2021a）においては，以下の“問いかけ（interrogazione, ask questions）”による考察を試みた：

> フィールドに出られないとき，フィールドワークに何が出来るのか？“フィールドに出られないフィールドワーク（Fieldwork that cannot appear in the field, ricerca sul campo che non puo apparire nel campo）”という経験は，人間と社会の“うごき”を捉える試みに何をもたらすのか？（新原 2021a: 51）

続いて，2022 年の論稿「フィールドワークの“想像／創造力”――惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(3)」（新原 2022d）においては，下記の“問いかけ”により，人間と社会のうごきを捉えるための「フィールド」（での「汗かき仕事」としての「ワーク」）の再定義と再構成をめぐる考察を行った：

> 「グローバルなフィールドとその物理的な限界（the global field and its physical boundary）」[14]を持つ惑星社会，“「壁」の増殖”“パンデミック”といった「解決」困難な問題に直面し続ける惑星社会において，探求すべき「フィールド」はいかなるものとなるのか？「フィールド」そのものを再定義・再構成し，組み直していくようなフィールドワークをいかにして探求するのか？（新原 2022d: 35-36）

ここでの“問いかけ”は，フィールドワーカーという特権的な在り方（ways of being）を問い直すものであった。すなわち，二酸化炭素（CO_2）を大量に排出するジェット旅客機で世界各地を移動することは，有限な地球環境に悪影響を与えることとなってしまわないのか。自分とは異なる条件で懸命に生きるひとたちの生活に悪影響を与えないのか。自由に移動できる人間が，簡単には移動できないひとたち，自分の意志とは関係なく移動を余儀なくされたひとたちに会いに行くとはどういうことか。フィールドワーカーの移動と環境難民や政治難民の移動とのちがいをどう考えるのかという“問いかけ”である（新原 2022b: 40）[15]。

現在は，ランペドゥーザ，メリリャ，セウタといった遠方の“境界領域”に足を伸ばしていた“惑星社会のフィールドワーク（Exploring Fieldwork in the Planetary Society）”[16]を「休止」する状況におかれている。

しかしながら，メルレルと新原，そしてそれぞれの研究チーム FOIST/INTHUM，“うごきの比較学”研究会のメンバーと練り上げてきた〈エピステモロジー〉は，フィールドワークの困難な状況においてむしろ智を産出するというものだった。すなわち，初期シカゴ学派，イアンニ，ブルデュー，メルッチ，宮本常一，鶴見良行等によってなされた，社会と個人の深層にまで入り込む調

査研究の遺産を受け継ぎ，学生・院生も含めて社会学や社会調査の理論と方法について膨大な実践と議論を積み重ね，フィールドで出会った「予想外」の困難に導かれるかたちで，複数のメソッドを生み出すメソドロジーを練り上げるという在り方（ways of being）である。調査者側の当初の作業仮説とは異なる理解の在り方，現象の現れ方，相関関係などに出会い，予想通りにいかない場合が，もっとも貴重なリフレクションの場を提供する「生成の理論」として願望し企図されていた。

それゆえこの時期は，COVID-19 以降の人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークのやり方（ways of exploring）を考える時期として理解される。そのためには，すでに“手元にのこされているものを生かし直す（reappropriating what is left at hand, riappropriarsi di ciò che è rimasto a portata di mano）”ことが肝要である。拙稿「“うごきの比較学”にむけて――惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (1)」においては，過去のフィールドワークにおいて，実はすでに「そこに在った」ものを“サルベージ（salvage, salvataggio, 渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”することの意義について言及している（新原 2017b: 82-83）[17]。

COVID-19 以前の最後のメルレルとのフィールドワークとなった 2019 年 3 月のメリリャ，セウタ，ジブラルタル，アンダルシア地方で出会ったことがらについての理解は，いまだ現在進行形である。これまでも，より土地勘のあるイタリア以外のフィールドについては，フィールドノーツと資料を組み合わせ，フィールドでの体験を再構成・再解釈することを試みてきた[18]。

2019 年 3 月のメリリャ他の調査については，『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』において，2019 年 3 月の調査の一部を紹介し，「フィールドワークの詳細については稿をあらためてとりまとめる予定である」としていた（新原 2020c: 55）。また，「願望のヨーロッパ・再考――「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク」（新原 2020d）においては，“「壁」の増殖（proliferation of ‘barrier’）”の観点から，メリリャ，セウタ，ジブラルタルでのフィールドワークの概要のみ紹介していた。

本稿では，メルレルとの間で錬成してきた“旅／フィールドワーク”の実際，“探究／探求の技法（arti di ricerca/esplorazione, art of exploring）”の観点から，メリリャでのフィールドワークに限定して，“サルベージ”を深化させることを目的とする。2019 年 3 月のメリリャ他の調査は，下記の理由で，“サルベージ”の深化という課題にふさわしい「フィールド」であると考える。

2019 年の調査に先立つ 2018 年のランペドゥーザ，アジナーラ調査は，1987 年以降の経験の蓄積があるイタリアをフィールドとしており，“対話的／対位的なフィールドワーク（dialogic and poly/dis-phonical Fieldwork）”の典型例となるものであった。そのため，「フィールドのなかで書く（writing in the field, writing while committed）」かたちをとったフィールドノーツにおいては，その場での観察，聴き取り，リフレクションなどは，後から再解釈していく要素が多くはならなかった。

これに対して，2019 年のセウタ，メリリャ，ジブラルタル，アンダルシアでの調査は，土地への理解・習熟度の低さと，イタリア語よりも理解度が低いスペイン語が主要な言語であったことなどもあり，その場でのメモ，日々のフィールドノーツの記述は，2018 年のフィールドワークと比較して濃密なものとはならなかった。

それゆえ，2019 年の調査は，「フィールドのなかで書くこと」に加えて，フィールドで出会ったものへの理解を，“サルベージしていく（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”という〈フィールドワークの再発見（Rediscovering of

Exploring Fieldwork in the Planetary Society, Ritrovare esplorando ricerca sul campo nella società planetaria)〉の具体例となり得るものであった。

ここでの「再発見」は，「覆い隠されていたものを掘り起こす（discover, scoprire）」ことのみならず，実はすでに出会っていたものと「再会する（ritrovare, rediscover）」という意味があった。そしてこの惑星社会の“フィールドワークの再発見”は，“フィールドワークによる社会文化的な島々の再発見（Rediscovering socio-cultural islands, Riscoprire le isole socioculturali）”でもあった。

では，本稿で試みたい過去のフィールドワークの“サルベージ”とはいかなるものであるのか。もともと1980年代半ばに行っていた沖縄・広島・長崎の調査を“サルベージする（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”必要を感じるに至っていた（新原 2017b: 82-83）。「新型コロナウイルス感染症（COVID-19, Coronavirus Disease 2019）」に直面し，フィールドに出られないフィールドワーク，さらに，COVID-19以降のフィールドワークを考える必要性を感得した。現在は，「走り続けて」いたフィールドワークのリズムをスローテンポにして編み直してみる機会であると考えられる。これは，以前に“方法としての旅”として提示した〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ〉である：

> 自らを表わし出す言葉を見いだそうとして，「言葉の海の真珠とり」となって旅に出る。自分の中でもつれてどうにもならないものを，他の人や土地という「海」と出会うことによって，少しずつ言葉の「真珠」を探り当てていく。探りあてられるのは，言葉のみならず人や土地とのつながりでもある。それが地球の裏側への旅であれ，自分の内面への旅であれ，何かものを考えるとき，まず見て歩き，においをかいだり，音を聞いたりして，記憶にとどめることが何よりも大切である。同じキャンバスの上に何度も絵の具を塗っていくように，一つ一つの木や草花，岩が持つ意味，都市や地域に住む人の生活，ものの感じ方考え方，ひとつひとつのものが持つ固有の意味が，少しずつ視界の中に入っていくような“旅”をしていきたい，そしてこの“旅”の物語を表しだしたい，そう思っていた。しかし，この“旅”の途上で，はじめは対象として語っていた相手をしだいに語れなくなり，自身のものの見方の枠組みが流動化するのをうっすらと感じた。対象は反逆するのである。そして，いつしか対象を語っているつもりがいつのまにか自分を語っていることに気付いた。しかし同時に，自分を語っているつもりがいつのまにか対象を語ってもいる。自分が溶けだし相互浸透がそこでは起こっている（新原 2002: 698）[19]。

この“旅（explorations, esprorazione, itinerarium）”を“サルベージ”する手かがりとなるのは，フィールドノーツ（デジタル，手書き），関連するメール（デジタル），クリアファイルで保管した実際のフィールドワークで使用した地図など，現地で収集した書籍，パンフレット等の紙の資料，動画，静止画などである。メルレルに書いてもらった手書きのメモなどの現物を見ながら動画に記録した話や，メモがわりに動画に記録したその場での理解，後から調べようと思ったことがらなどについて確認していく。動画や静止画を見直しつつ，その他の各種資料も机の上に並べ，フィールドワークを追体験し，フィールド「での／から」の理解を再構成していく（istruirsi viaggiando, learning/unlearning in the field）”。

現地に行く前の対話・談話（chiacchierare），フィールドでのデイリーワークとしてのふりかえり，旅の終わりのふりかえり，訪れた土地のその後の出来事との「再会」など，フィールドワーク

の“サルベージ”を，以下では試みる。ここから，本稿での“問いかけ”は以下のものとなる：

> フィールドに出られないという経験，「壁」の増殖”と“パンデミック”のなかで，どのような過去の“対話的なフィールドワーク”の“サルベージ”によって，COVID-19 以降の人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークを構想し得るのか？

3　2018 年 8 月 6 日サッサリでの対話

2019 年 3 月のメリリャ，セウタ，ジブラルタル，アンダルシア地方でのフィールドワークに先立って，2018 年は，ランペドゥーザとサッサリ市郊外のサンタ・マリア・ディ・ピサ地区の調査（3 月 5 日から 3 月 12 日），宮古・石垣調査（3 月 26 日から 3 月 29 日），ウイーンとサッサリ市郊外のサンタ・マリア・ディ・ピサ地区，アジナーラ島での調査（7 月 30 日から 8 月 8 日）を行っている。

メルレルとの間で練り上げてきた対話的かつ対位的なフィールドワークにおいては，新たな「出会いと再訪」「再会」を組み合わせた“複合・重合的に練り上げられたフィールドワーク（ricerca sul campo elaborato in modo composito）”の軌跡をふりかえり，“多系／多茎の可能性（the possible routes to the various alternative systems）”を展望するため，“対話的にふりかえり交わる（facendo riflessione e riflessività）”“対比・対話・対位しつづける（comparing dialogically and contrapuntally）”時間を確保している。

2018 年 8 月 6 日も，そのような“対話的／対位的なフィールドワーク”の“基点／起点（anchor points, punti d'appoggio）”の一つであった。以下では，動画として残した記録に基づき，“サルベージ”を試みる。

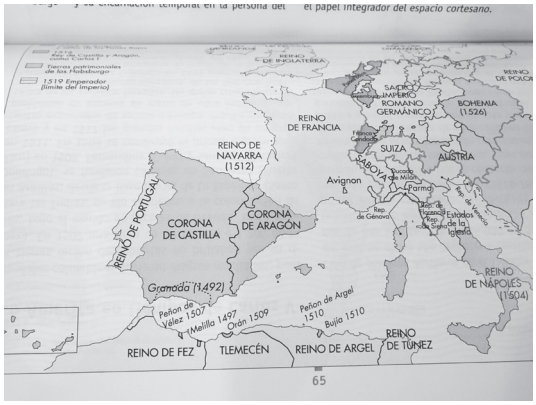
サッサリ市のメルレル邸の書斎で，メルレルは，地図で概観するかたちでスペインの歴史を概観する書籍（Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero 1999）を取り出し，ページをめくりながら，イベリア半島，とりわけ北アフリカも含むアンダルシア地方（アンダルスは，この地を支配したヴァンダル族に由来するイスラムによるこの地の呼称）の歴史を，フェニキア，カルタゴ，ローマ，ゲルマン，イスラム，「レコンキスタ」といったかたちで鳥瞰していった。

前稿「A. メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み」（新原 2017a）で詳述したように，ブラジルとポルトガル語圏への造詣の深いメルレルは，（Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero 1999: 57）に示された 1479 年の地図の時点で，ポルトガル王国（Reino de Portugal）が，セウタやタンジェが位置するジブラルタル海峡対岸の北アフリカの地域を，「アルガルヴェの飛び地」（Algarve ultramar）として占拠していることに着目した。アルガルヴェの呼称は，イスラム側から見たイベリア半島西部（アル・ガルブ）の意味から来ている。この時期（15 世紀末）には，北アフリカの一部も含めた地域がアルガルヴェとされていたことがわかる。

さらにページをめくり，（Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero 1999: 59）に示された地図では，セウタやタンジェはまだポルトガル領であるが，メリリャが新たにスペインの「飛び地」となっていることがわかる。そして，メルレルと新原にとっては，この二つの地図のどちらにもサルデーニャ王国が Reino de Cerdeña として書き込まれていることにも意味があった。

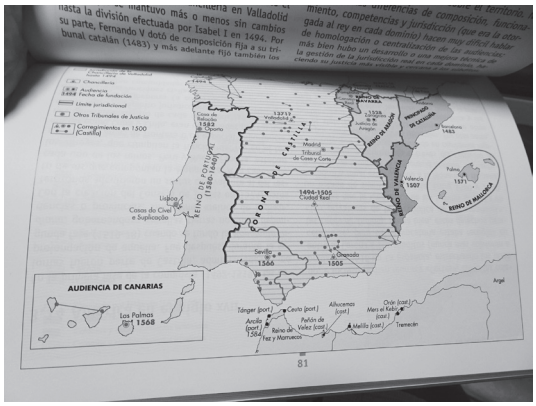
続いて，（Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero 1999: 65）に示された地図では，1497 年にカスティーリャ＝アラゴン連合王国が占領したメリリャに加えて，ペニョン・デ・ヴェレス（Peñón de Vélez 1507）やオラン（Oràn 1509），ベジャイア（Bugía 1510）などが記されている（写真 ①）。メルレルは，現在アルジェリアの都市となっているオランやベジャイアを訪れたときのことを話す。

写真①　カルロ5世統治下のヨーロッパの「飛び地」



＊ 以下，すべての写真は筆者が撮影したものである。

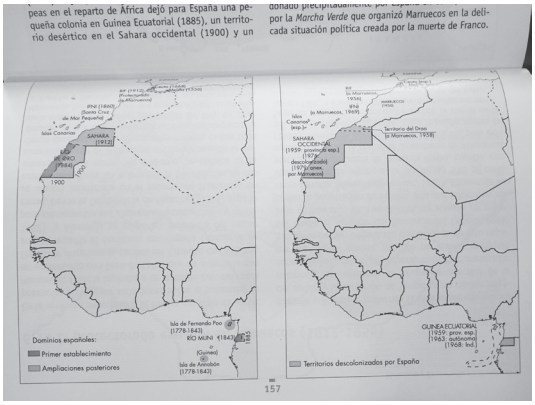
写真②　アフリカ北岸のヨーロッパの「飛び地」



さらに，(Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero 1999: 81）の1371年から1700年までのアフリカ北岸の「飛び地」を示した地図では，ポルトガル領のタンジェとセウタ，カスティーリャ領のペニョン・デ・ヴェレス，アルセマス（Alhucemas），メリリャ，メルス・エル・ケビール（Mers el-Kébir），オランなどが書き込まれている[20)]（写真②）。

そして，スペイン継承戦争（La Guerra de Scesión Española 1701-1715）を経て，(Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero 1999: 91）では，ジブラルタルは1704年にイギリスに占領されたが，セウタ，ペニョン・デ・ヴェレス，アルセマス，メリリャ，メルス・エル・ケビール，オランは，スペ

写真③　アフリカ北西部のスペインの植民地



インが占拠する「飛び地」として，19-20世紀の，「主権の及ぶ土地，プラサス・デ・ソベラニア（Plazas de soberanía）」の基礎となっていった。その後も，スペイン領モロッコ，スペイン保護領モロッコ（Protectorado español de Marruecos）の時代も，セウタとメリリャは，他のスペインの植民地とは，中世以来の異なる位置付けをとり続けた。ポルトガル領であったタンジェもまた，国際都市という位置付けで，独立後のモロッコ内でも固有の位置付けがなされている（写真③）。

これまでメルレルと新原は，“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”から，社会の“衝突・混交・混成・重合の歩み（percorso composito）”を見てきた。それは，世界各地の“うごきの場（field of nascent moments/processes, campo di momenti/processi nascenti）”に居合わせる（trovarsi lì per caso ai divenire in cui si verificano momenti critici）”ことによって，“うごきの比較学（“Comparatology”of nascent moments/processes）”を構築する試みでもあった。

メルレルと新原がこれまで人間と社会のうごきをとらえる“場（place, space, place, site, case, circumstance, moment, condition, situation）”として着目してきたのは，自然地理的物理的な島嶼（isole fisiche）のみならず，“社会文化的な島々

(isole socio-culturali)”であった。

「陸地の中に在る海（mare fra le terre)」であった地中海は，三つの異なる大陸（アフリカ，アジア，ヨーロッパ）の出会う場所であり，大小無数の島々，海を囲む沿岸の陸地，さらには，この海へと水を運ぶ山野も含め，分離・分割されることないひとつのまとまりをもった複合体であった。

“社会文化的な島々（isole socio-culturali)”は，これまで都市や地域のフィールドワークで見てきたように，その土地の住民がどのような階層，社会的に出自を持つか（origine sociale)，どのような移動の経路を辿ったか（passaggio）によって，別の場所とは区別された“社会的境界（confine sociale, limite sociale)”を形成し，その境界は，これまでの在り方がゆらぎ，切り結び，組み直され，新たなものが生成していく“うごき(becomings, metamorfosi)”のなかで流動していく。

これに加えて「飛び地（enclave ed exclave)」という制度的な島々（isole istizuzionale）について考える必要が出てきた。新たな島嶼概念が「主権の及ぶ島々（isola di sovranità politica)」である。たとえそこが，耕作に適した平野を前提とする見方からするなら，価値のない土地，端，岩礁であったとしても，さらなる領土と領海獲得をめざす大陸の中心部から見て，国家戦略的・商業的・軍事的・文化的な要衝として確保されるべきものとなる。そこでの“島々”は，あくまで中心の「主権」との関係性によって位置付けられる。ボルネオと東ティモール（インドネシア)，ブルネイ（マレーシア)，「国家の主権，国家と制度の飛び地（sovranità dello stato, enclave statuale e istituzionale）としてのヴァチカン，そして，植民地主義の残滓（residuo coloniale）でもあるセウタとメリリャ，ジブラルタル（Gibilterra）の歴史から考えていくことが出来る。シンガポールは，マラッカ海峡という要衝の地と統治するための場所として，物理的，社会文化的，国家の主権(isola fisica, socio-culturale e sovernità statale）という条件を持っている。

ここでは，国家の主権をめぐる闘争によって，境界線が移動（confine mobile）するが，同時に，ひとつのまとまり，切り離すことが出来ないつながりと，「多義性・あいまいさ（ambiguità)」「複数性（pluralità)」「多岐性（molteplicità)」を持つ境界領域（cumfinis）でもある。

わずか19km^{2}のセウタ，23km^{2}のメリリャ，加えてチャファリナス諸島，ペニョン・デ・アルセマス，ペニョン・デ・ベレス・デ・ラ・ゴメラなどのスペインの「主権の及ぶ土地（Plazas de soberanía)」は，境界線（線引き，移動）と境界領域，双方の観点から考えることができる。

イタリアもまた，ロードス島と12の島々を「政治的主権の島（isola di sovranità politica)」にしようとしたが，第二次大戦ですべてを失った。キプロス島，アジアの南西諸島，サハリン，北方四島なども，この観点から考えることが出来る。

2018年3月にフィールドワークしたランペドゥーザでの移民・難民の到来との比較では，セウタとメリリャは，どのような歴史的地域であるのか。異質性の衝突・混交・混成・重合（collisione, mescolanza, ibridazione e polimerizzazione dell’eterogeneità)”の長期的持続を特徴とするセウタとメリリャは，新たに短期的な境界線の移動（confine mobile）もしくは，複合的で多発的な越境が起こり，多孔性とますますの非対称性を持った“(衝突・混交・混成・重合の要因をより多く抱えた）場”へと変化・定位させられるというプロセスのなかにあると理解できる。

セウタ，メリリャをフィールドとして，境界領域の歴史を構造的に理解するにあたって，「レコンキスタ（Reconquista)」という描かれ方の意味を考えたい。イベリア半島南部と北アフリカ沿岸部のアル・アンダルス（Al-Andalus）地方は，イスラム世界とキリスト教世界との“衝突・混交・

混成・重合の歩み（percorso composito, composite route）”によって形成されている。同地域のヨーロッパ系から見ても，自らを構成する不可分の要素を“異物（corpi estranei, foreign bodies）”とする意味合いを持つ言葉となっている。そしてまた，イベリア半島から追放され，征服された側であるアフリカのアマジグ（Amazigh）人からするなら，1492 年以降は，「ヨーロッパによって征服された土地の失地回復の歴史」である。たとえば，スペインの飛び地領だったイフニ（Ifni）は，何度も国境線と主権が移動している。そのなかで三次にわたるリーフ（Rif）戦争が起こっている。

2019 年 3 月のフィールドワークの前に，およそ以上のような鳥瞰図を自らのなかに“塑造・造形する（shaping, dare forma）”ことをしていた。

以下では，翌年 2019 年 3 月のメリリャでのフィールドワークの足跡を辿っていく。

4　2019 年 3 月 17 日メリリャでのフィールドワーク

ここから，2019 年 3 月に行ったスペイン南岸とモロッコ北岸のメリリャ，セウタ，ジブラルタル，アンダルシア地方でのフィールドワークをふりかえっていく。本章ではまず，「フィールドのなかで書くこと（writing in the field, writing while committed）」によって蓄積されたデータを確認する。

このフィールドワークは，2019 年 3 月 15 日から 3 月 24 日にかけて行われ，下記の旅程にて移動した（地図 ③）：

2019 年 3 月 16 日（土）　羽田―[空路]―パリ―[空路]―マラガ

2019 年 3 月 17 日（日）　マラガ―[空路]―メリリャ

2019 年 3 月 18 日（月）　メリリャ

2019 年 3 月 19 日（火）　メリリャ―[空路]―マラガ―[陸路]―アルヘシラス

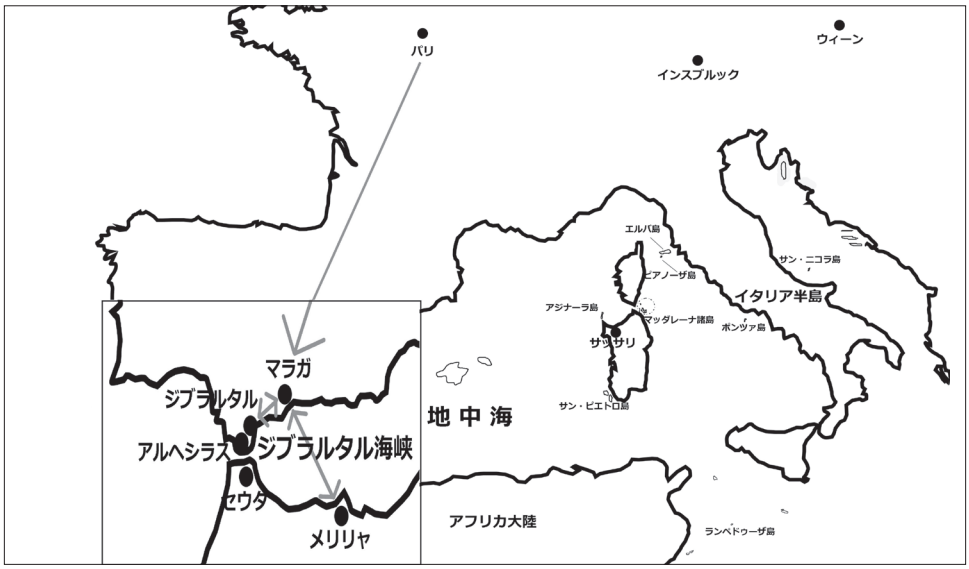
2019 年 3 月 20 日（水）　アルヘシラス―[陸路]―ジブラルタル―[陸路]―アルヘシラス

2019 年 3 月 21 日（木）　アルヘシラス―[海路]―セウタ

2019 年 3 月 22 日（金）　セウタ

2019 年 3 月 23 日（土）　セウタ―[海路]―アルヘシラス―[陸路]―マラガ― [空路]―パ

地図 ③　2019 年 3 月の移動経路



リ―［空路］―羽田

本稿では，メリリャとかかわる 3 月 16 日～ 3 月 19 日，最終日のリフレクションとかかわる 3 月 23 日のみを考察の対象として，3 月 20 日～ 3 月 22 日は稿をあらためて検討する。

調査者は，メルレル，鈴木鉄忠，新原道信の 3 名であった。鈴木・新原がパリ経由でマラガに入り，マラガでメルレルと合流，まずマラガを基点として空路にてメリリャに入った。メリリャからマラガにもどり，陸路でアンダルシア地方のコスタ・デル・ソルを，西へ移動しアルヘシラスに到着した。続いてアルヘシラスを基点として陸路ジブラルタルに入り，さらに海路でアルヘシラスからセウタへと向かい，アルヘシラスを経てマラガまでもどり，ここで，鈴木・新原とメルレルは異なるルートで帰路についた。

使用した主要な言語は，マラガ，メリリャ，アルヘシラスではスペイン語，ジブラルタルではスペイン語と英語，セウタではスペイン語とフランス語である。メルレル・鈴木・新原の間ではイタリア語を使用した。

具体的な“サルベージ”の「作業」においては，動画のなかでメモ代わりにのこしておいたその場での理解（デジタルなメモ）は，後にフィールドワークをふりかえる際の大きな助けとなった。その場で時系列順に撮影した写真，実際に歩くときに使用した書き込みのある地図，各所で収集した紙の資料・書籍（ドキュメント），手書きのメモなどを，すべてテーブルのうえにひろげ，“サルベージ”をすすめた。

紙の資料・書籍（ドキュメント）は，紙製のファイルボックスに収納し，手書きメモや現地で使用した地図等はクリアファイルにて保存している（写真 ④）。

収録した動画と写真については，下記の分量となっている：

写真 ④　ファイルボックスとクリアファイル

2018 年 8 月 6 日　サッサリにてメルレルとの対話　動画 19 分　写真 43 枚（動画より撮影）

2019 年 3 月 16 日（土）　羽田［空路］パリ［空路］マラガ　動画 6 分　写真 119 枚

2019 年 3 月 17 日（日）　マラガ［空路］メリリャ　動画 53 分　写真 306 枚

2019 年 3 月 18 日（月）　メリリャ　動画 101 分　写真 338 枚

2019 年 3 月 19 日（火）　メリリャ［空路］マラガ［陸路］アルヘシラス　動画 28 分　写真メリリャ 4 枚＋アルヘシラス 160 枚

2019 年 3 月 20 日（水）　アルヘシラス［陸路］ジブラルタル［陸路］アルヘシラス　動画 28 分　写真アルヘシラス 3 枚＋ジブラルタル 256 枚

2019 年 3 月 21 日（木）　アルヘシラス［海路］セウタ　動画 43 分　写真アルヘシラス 39 枚＋ジブラルタル 197 枚

2019 年 3 月 22 日（金）　セウタ　動画 44 分　写真 336 枚

2019 年 3 月 23 日（土）　セウタ［海路］アルヘシラス［陸路］マラガ［空路］パリ［空路］羽田　動画 98 分　写真セウタ 2 枚＋コスタ・デル・ソル 25 枚

動画は撮影可能な場所・場面のみであるが濃密

な内容・情報量があり，写真も撮影可能な場所・場面のみであるが，ほぼ時系列上に撮影がなされているため，実際のフィールドワークでのうごきを，地図や手書きメモを参照しながら再現するための大きな手かがりとなっている。

以下では，3月17日～18日（16日と19日の移動日についても一部言及する）のメリリャ調査を考察の対象として，日付順にデータを整理し，下記のかたちで記述をまとめ，考察を行う：

⑴「フィールドのなかで書いたもの（written in the field, written while committed）」の確認

① 2019年3月の調査において，調査日の夜もしくは翌朝に書き残したフィールドノーツを「　」のかたちで記述する。

② 2019年3月に撮影した動画を中心に見直しながら，動画のなかで発せられた言葉（動画に記録された音声メモ）を書き起こし，“　”のかたちで記述する。

⑵ フィールドノーツの「修復」作業

③ この二つのフィールドノーツに，写真，地図，ドキュメント，手書きのメモを組み合わせることで，フィールドノーツの“隙間を埋める（caulking, calafatare）”ための「修復（restauramento）」作業を行い，実際のフィールドでの体験・体感を出来る限り再現することを試みた。

以下では，その日の調査の終了後に書き残したフィールドノーツを「　」として，動画からの音声メモを“　”のかたちで記述し，明らかな誤字脱字以外は修正することなく記載する。

2019年3月16日（土）　羽田―［空路］―パリ―［空路］―マラガ

「夜半に羽田を発つ便で早朝のパリに到着し，マラガ行きの便に乗り換える。長時間の旅の疲れで眠気が襲い，朦朧としながら，マラガ空港のBarでメルレルを待つ。メルレルが無事到着し，タクシーでホテルDon Pacoへ向かう。ホテルに荷物を置いて，すぐに市内を歩く。ヨーロッパの都市と地域の構造について，きわめて深い造詣と洞察力を持っているメルレルの案内で，土曜19時過ぎのマラガ市街の中心部へと向かう。マラガは，メルレルにとっては“オリエンタルな雰囲気”のある街だ。」

「時折，1930年代の建物にも出会うが，ホテルのある郊外には，広い道路と，フランコの時代（1950年代～60年代）に建設された建物が続く。フェリペ2世（Felipe II, 1527-1598）時代の痕跡を残す中心部にむかっていくと，20世紀初頭，19世紀，さらに15，16世紀の建物に出会うことが出来た。土曜の夕方で，手をつないだ老夫婦，家族連れが着飾って歩いている。港近くの広場では，若者たちがスケートボードに興じている。司教の住居がある広場のレストランで小皿料理（Tapas）を食してホテルにもどる。」

「西地中海の海と陸をはさんだ地域であるアンダルシア（アル・アンダルス）の最初の体験となる。ブローデルの『地中海』（Braudel 1966 = 1991）[21] とメルレルとの共著論文（Merler e Niihara 2011a; 2011b）を見直しておきたい。」

2019年3月17日（日）　マラガ―［空路］―メリリャ

「ホテルからマラガ空港へと向かう。メリリャへは，レシプロ機のAT72での飛行となる。メリリャの空港に着くと，イベリア航空にはメリリャからマドリードへの便があること，セウタへはヘリコプターのチャーター便があることなどがわかった。空港からのタクシー代は，11ユーロで観光客向けの値段とはなっていない。港からロベラ公園（Parque Lobera）沿いの道（Avenida Candido Lobera）を上り，ホテル（Parador de Melilla）に到着する。」

“スペイン系のタクシー運転手によると人口の大半がムスリムのニューカマーとなっている　同じ港湾内にスペインとモロッコの港があることが「自然な情景」となっている。メルレルはしきりに経済，観光の状況についてきく。”

「ホテルの受付の男性と話す。先住のリーフ（ベルベル）系だと思われる男性は，ホテルの歴史と伝統について誇らしげに語り，展示物を案内してくれる。ホテルでまず情報を集め，旧市街の文化広場（Plaza de las Culturas）にある旅行案内所へと向かう。ここに勤務している若者はきわめて親切かつ有能で，的確なアドバイスをしてくれる。日曜日の広場では，たくさんの子どもたちが遊びに興じている。スペイン系の子どもたち，アフリカ系（肌の色が濃いサハラ以南から来たであろう人たち），ベルベル族系の比較的肌の色の薄い人たちが混じりあって，ともに遊んでいる。」

“旅行案内書の男性はおそらくリーフ系のメリリャ人。広場の壁は，17 ～ 18 世紀に建造されたもので文化遺産となっている。”

「巨大な要塞のなかの歴史学・考古学・民俗学博物館に入る。長い時間のなかで，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教，ヒンドゥー教，ロマ（ヒターノ，スペインのジプシー）文化が，共生を模索してきた土地であることがわかる。アンダルシアは，アフリカ北岸，イベリア半島南岸のポルトガル，スペインも含んだ，まさに地中海の境界領域であった。」

“キリスト教，イスラム教，アマジグ（ベルベル），ヘブライ，ロマ（ヒターノ）の文化が混じり合う。とりわけメリリャは，モロッコと同じく，ヘブライに対して寛容だった。イスラムのなかにキリスト教の社会文化的な島々が存在し，さらなる他者であるヒンドゥーやロムへの寛容がある。アマジグ（ベルベル）・ロマ（ヒターノ）・セファルディ（15 世紀頃にイベリア半島から追放されたユダヤ人）の民俗文化博物館（Museo Etnográfico de las Culturas Amazigh, Gitana y Sefardí）では，新石器時代からカルタゴ，ローマ帝国，イスラム，スペインという描かれ方をしている。”

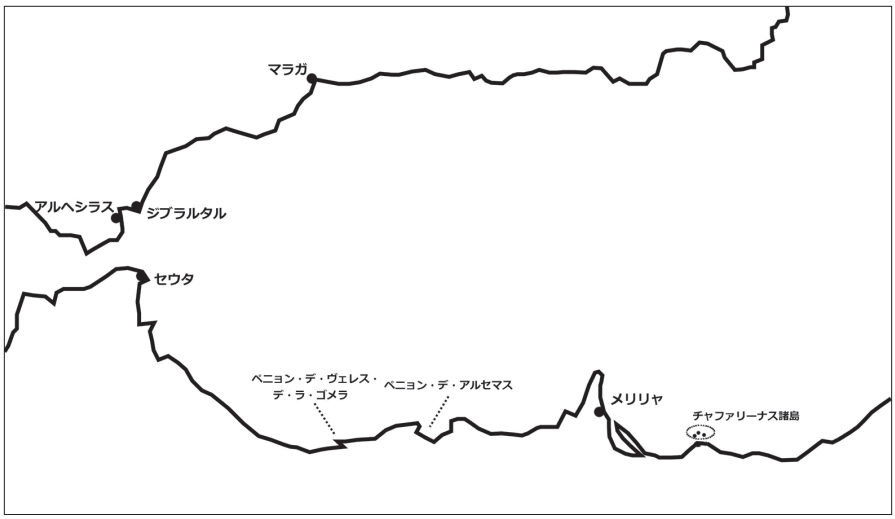
写真 ⑤　北アフリカにおけるベルベル族の分布

“博物館ではスペイン語辞書にある berber あるいは moro でなく，北アフリカ先住民族の自称に基づく呼称 Amazigh（単数名詞）を採用している（複数形は Imazighen）。「アマジグ文化（Cultura amazigh）」というコーナーがあり，そこには，「4000 を超えるベルベル語が在る（Màs de 4000 variedades de tamazight）」と書かれている（写真 ⑤）。”

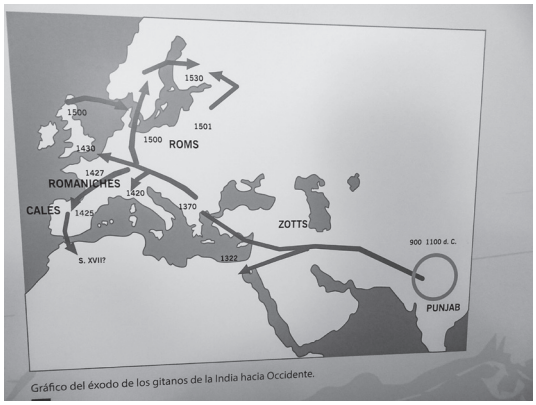
“ロマのコーナーには，ロマの言葉で Lungo drom，スペイン語で largo camino（長い道のり）と書かれている。パネルには，パンジャブ地方から 10 ～ 12 世紀頃に移動を開始し，14 世紀末にはエジプトとバルカン半島，15 世紀にはイタリア半島，イベリア半島，17 世紀頃には北アフリカにやって来たとある（写真 ⑥）。1971 年 4 月 8 日には，ロムの世界大会がロンドンで開催され，メリリャでも 2007 年に，この日を記念日としている（A partir de entonces, se decidió luchar por el reconocimiento de este pueblo y dotarlo de su bandera e himno. En Melilla se conmemora este día desde al 2007）。”

“アンダルシア出身の詩人・劇作家のガルシア・ロルカ（García Lorca）はロマの文化を讃え

地図④　スペインの主権の及ぶ土地



写真⑥　ロマの移動経路



写真⑦　旧市街の建築物

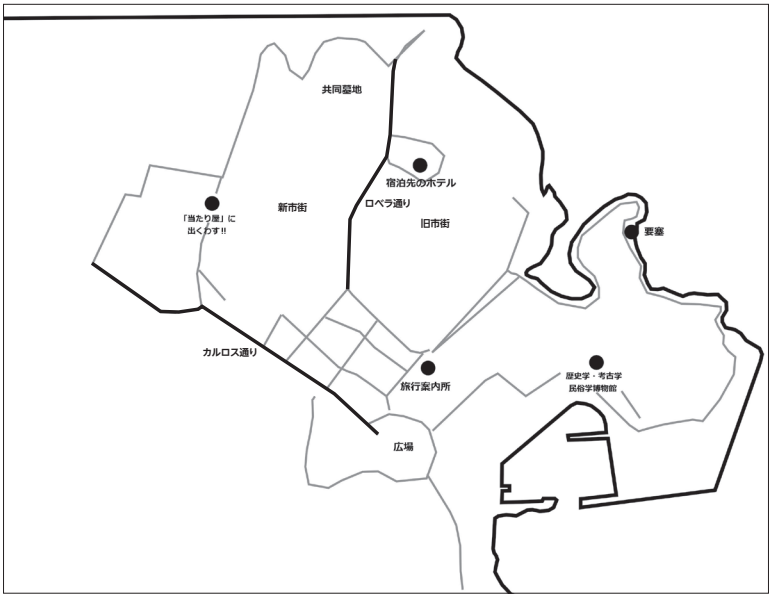
る詩を書いている。”

“セウタ，ペニョン・デ・ヴェレス・デ・ラ・ゴメラ（Peñón de Vélez de la Gomera），ペニョン・デ・アルセマス（Peñón de Alhucemas），チャファリーナス諸島（Islas Chafarinas）などのスペイン領の島々・半島の地図とメリリャの地図がいっしょに飾られている（地図④）。”

「灯台のある旧市街へ。旧市街のなかの宗教的なアソシエーションが運営する食堂にて昼食をとる。店を教えてくれた男性たちは，メルレルによればロマ（ヒターノ）系であった。文化広場からスペイン広場，隣接する巨大な公園，カルロス通り（Avda. Juan Carlos I Rey）のアールデコ，近代主義（modernista），バルセロナ風の建物を見る（写真⑦）。」

「カルロス通りからカステラール通り（Castelar）に入るとモロッコ系の人たちの割合いが急増し，あたり屋を目撃する。走っている車に，モロッコ系の若者が突進し，大きな音がして車が急停車すると，あっという間に，建物のなかから飛び出し

地図⑤　メリリャの市街図とフィールドワークの経路



てきた群衆が車を取り囲み，ドライバーが外に引きずり出された。メルレルは咄嗟に，「これは危険だ！　写真もビデオも撮るな。すぐにこの場を離れたほうがいい」と言い，駆け足でその場を離れた。」

“博物館を出て，ヒンドゥーの建物を探していると，あたり屋に遭遇し，メルレルのとっさの判断で緊急避難する（危険なため映像は残していない）。その後，モロッコから来たイスラム教徒の学校の前に出る。”

「市場を通り過ぎ，ホテルへともどる。空港からホテルへの移動に際してスペイン系のタクシー運転者が言っていたように旧市街から一歩離れると，住民たちの大半はもはや新たにやって来たモロッコ人だということを実感する（写真⑧）。19時過ぎにホテルにもどると，受付にはリーフ系の女性がいた。メルレルが，いろいろと質問すると，彼女は，モロッコの（おそらく）ベルベル族（リーフ系）の家系で，モロッコに生まれたが，アンダルシア地方に移住したという。男尊女卑の父親から離れたいと思い，イスラム教から離れ，かといってキリスト教に改宗もせず，『無神論者』として，一人で暮らしを立てているという。」

「ホテルにて夕食。給仕の女性は，こちらの様子を気にかけず一方的に話すことから，観光客慣れはしていない，もしくは外来の客を想定したサービスをするという理解はもっていないと推定される。」[22)]

「本日のフィールドワークで実際に歩いた道を地図に記し，それぞれの場所で起こったことを書き込む。旧市街からホテル（Parador de Melilla）へと向かうロベラ通り（Avenida Candido Lobera）を境に，要塞側は旧住民，反対側はモロッコからのニューカマーの居住者が多くなっているのではないかという仮説を立ててメルレルに話す（地図⑤）。」

5　2019年3月18日メリリャでのフィールドワーク

2019年3月18日（月）　メリリャ

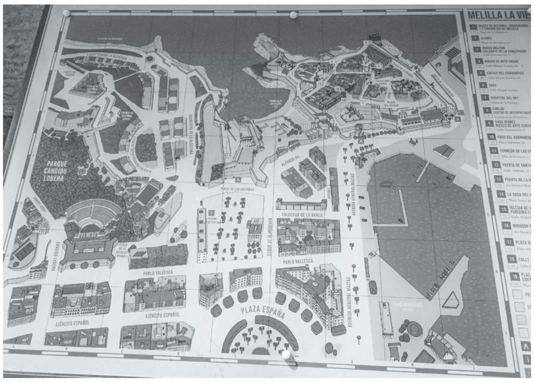
“カンディド・ロベラ公園 Parque Cándido

写真⑧　フィールドワークで実際に使用した地図

Lobera を登って城塞の丘の上のホテル Parador de Melillia の窓から，要塞と Modernista の旧市街とモロッコからの住民の多くが暮らす新市街（1950 年代以降の建築と思われる）を見渡し，市街の配置（constellation/costellazione）を理解する（写真⑨）。

“公園と教会を切れ目として，建物の色合いや窓のつくりも違う。長い時間をかけて“衝突・混交・混成・重合の歩み（percorso composito, composite route）”を続けてきた領域（area）と，新たに大量にモロッコ，アラブ，サブサハラ（サハラ沙漠以南のアフリカ）からやって来た移民・難民の居住地が隣接していることを，ホテルの窓

写真⑨　街中で発見したメリリャの要塞を中心とした旧市街の見取り図



写真⑩　共同墓地近くの新市街

から鳥瞰する。前日，目にとまり，ホテルの窓から確認した共同墓地へとまず向かうこととする。”

「墓地は，博物館とならんで，その土地の集合的アイデンティティ・記憶の在り方を理解することを助けてくれるため，前日，ホテルの窓から遠望していた共同墓地（Cementerio de la Ciudad Autónoma de Melilla）へと向かう（写真⑩）。」

“スペイン系とモロッコ系の混住の地区から，モロッコからの新住民（「ニューカマー」）の居住地区を通り過ぎて，共同墓地と向かう。墓地の近くには巨大なゴミ処理工場がある（遠くから見たときは海水精製工場かと類推した）（写真⑪）。”

“共同墓地からつづく山腹につくられた建物はブラジルの貧民街（favela）のようになっていくかもしれないとメルレルが見立てた街並みがつづく。共同墓地は 130 年程前に各教会から遺骨が集められ，造られたことがわかる。墓地内に入っていくと，巨大な家族墓と子どもたちの墓。海難事故などの遺体の名前のない墓などがある（写真⑫）。”

“墓地内には巨大な建造物が散見され，メリリャの「先住民正規軍のパンテオン（Panteón, Grupo de Fuerzas Regulares Indígenas de Melilla 1923）」，「アルセマスの先住民正規軍のパンテオン（Panteón, Grupo de Fuerzas Regulares Indígenas de Alhucemas 1927）」が配置されている（写真

写真 ⑪　共同墓地近くのゴミ処理工場

写真 ⑫　共同墓地の内部

⑬)。

その周りには，1909 年の第 2 次リーフ戦争（The second Rif War），第 3 次リーフ戦争（1921–1926 年）の戦没者たちの墓が配置されている。墓碑銘をひとつひとつ見ていくと，1909 年，1912 年，1921 年，北アフリカ戦線で戦没した歩兵，騎兵，警察官たちであることがわかる。出自は様々で，スペイン系，リーフ系の「先住民」の兵士の墓，1916 年に没したスペイン兵とアラブ系の兵士の墓などがある。ここでは，「故郷メリリャを守ろうとして命を落とした先住民兵士」という物語が構築されている。

“墓の整備をしている兵士（先住民正規軍 Fuerzas Regulares Indígenas の一員）と話をする。兵士の墓より低い場所に置かれている墓は，国境をこえ，親と生き別れになってやって来た「不法

写真 ⑬　アルセマス兵士のパンテオン

入国の子どもたちの墓だ」と言う。”

「共同墓地からあたり屋の事故のあった地区を過ぎて，modernista の地区にもどり，Plaza Menéndez Pelayo 広場向かいのサグラド・コラソン教会（Iglesia del Sagrado Corazón）に入る。ここには，スペインにやって来た移民・難民についての展示がある。」

“ヨーロッパからアメリカ大陸へ，そして現在の逆流現象という捉え方の展示がある。チュニジア，モロッコを経て，スペインへ。セネガルからスペインへ。ブルキナファゾからニジェール，アルジェリア，モロッコを経て，セビリアへ。シリアからレバノン。個々人の写真とともにその“背景（roots and routes）”が記されている（写真 ⑭)。”

「メルレルが調べていた本屋 Mateo へと向かう。メリリャ唯一のきちんとした本屋で，メリリャに関する歴史書や歴史史料を閲覧でき，複数の本を確保する。その後，グラナダ大学通信教育部で少し話を聴き，案内してもらう。案内してくれた方はメリリャ出身ではなかったが，建物内の移民・難民関係の出版物の掲示はとても重要だと思われる（写真 ⑮)。」

“旧市街のカルロス通り（Avda. Juan Carlos I Rey）の本屋 Libreria Mateo にて，本についての

写真 ⑭　ブルキナファゾからの難民の移動経路

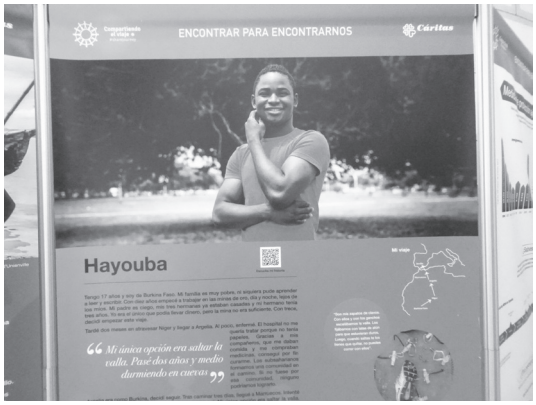


写真 ⑮　シリアからの難民家族の移動経路

各種の質問をしながら，店主による歴史理解を聞く。古地図を見ながら店主のメリリャ理解が語られる。植民地時代のフランコ将軍についてなど，おかれている本は，ここでしか手に入らない特殊な郷土本が多い。メルレルは，リーフ地方の1904年の古地図を購入する。女性のためのカトリックの学校，文化センターのなかにある通信制大学などを見学する。文化センターにはリーフ地方の言語・文化・歴史に関する本が多数展示されており，研究センターとなっている。”

「教会近くのレストランにて昼食をとる。古い

写真 ⑯　野菜と肉の入ったクスクス

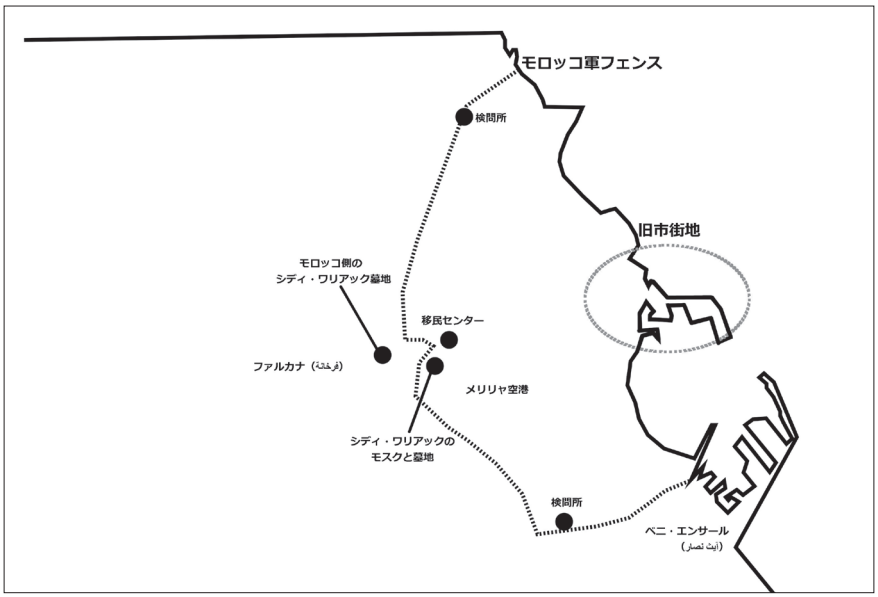
レストランで，現在はリーフ系のひとたちが経営し，料理をつくっている。野菜と肉の入ったクスクスは絶品だった！！」

“アラブ風の味付けの肉料理と豆料理を食す（写真 ⑯）。メルル通り（Pasaje David Melul）にある建築家エンリク・ニエト（Enrique Niet）の設計したシナゴーグを見学する。建物がつくられた1924年には，すでにヘブライの文化とユダヤ人は地域によく馴染んでいたことがわかる。メリリャでの建築資材も人材もモロッコから来ている。”

「タクシー乗り場で出会ったOmar氏（仮名）のタクシーで，Frontiera（国境検問所），フェンス，イスラム教徒の共同墓地，海水精製工場へと向かう。祖父の代からずっと，リーフ系の先住民として，メリリャで暮らしている。5年間の先住民正規軍での軍隊生活を経て，現在はタクシーの運転手をしながら警察官になるための勉強をしている。現在は29歳で11ヶ月の子どもと妻がいる。彼との出会いがなければ，Frontiera（国境検問所）の場所もわからなかったし，近年建設された国境沿いの4種類もの金属のフェンスの付近にも行くことが出来なかった。また，彼の仲介で，イスラム教のイマーム（指導者）にモスクの内部を見せてもらえることになった。」

“ここからOmar氏のタクシーで，国境検問所に向かい国境沿いを走る。スペイン本土では解体

地図 ⑥　メリリャの広域地図



されたフランコの銅像が残っている。以前は鉄道が存在していた。Omar 氏の祖父は第三次リーフ戦争にスペイン軍の先住民正規軍（Fuerzas Regulares Indígenas）の兵士として参戦したという。”

“メリリャで商品の買い出しをしてモロッコ（からさらにサブサハラ）へと帰る人々を撮影していると係官がやって来て検問所内に連行され取り調べを受ける。没収はされなかったが写真・動画の公表を禁じられる。モロッコ軍の建設したフェンス沿いに運転してもらい Frontera España – Marruecos を越えてさらに北上し（写真⑰），国境沿いの真ん中ほどに位置するイスラム教のモスク Mezquita Sidi Guariach と墓地シディ・ワリアック Cementerio de Sidi Guariach に案内してもらう（写真 ⑱）。国境を越えたモロッコ側にもファルカナ（Farkhana, فرخانة）町のイスラム教の墓地が広がっている（写真 ⑲）。Omar 氏の母上も含めて以前はモロッコ側に埋葬されていたそうだ（地図 ⑥）。”

写真 ⑰　モロッコ軍の建設したフェンス

“シリア，イラク，イランの人々が多くいる移民センター Centro de Estancia Temporal de Inmigrantes（CETI）を外から見学する（写真 ⑳）。センターの外で多くの人が歩いている。ここからヨーロッパへと移動していくのを待っている。国境沿いの地区では麻薬や売春の問題などが発生している。”

“軍事演習地を越え，海岸沿いに南下して，メ

写真 ⑱　国境近くのモスク

写真 ⑲　モスク近くのメリリャの墓地とフェンスを挟んでモロッコ・ファルカナ側の墓地

写真 ⑳　移民センターの入口

写真 ㉑　モロッコ風 Bar のミントティーとお菓子

リリャ港内の砂浜 Playa de la Hípica 付近のモロッコ風のミントティーを飲める Bar にて休息する（写真 ㉑）。メリリャの港の先には，モロッコ領内のベニ・エンサールの港が拡がっている。休息後，旧市街にもどる。宿にもどってから，あらためて遠景の意味を解読する。”

「夕刻，ホテルにもどり，本日のことをメルレル，鈴木とふりかえる。メルレルは，ホテルの従業員，運転手，本屋の店主など，出会う人すべてに，生業・産業について質問していたが，ここからの理解として「トータルな従属（dipendenza totale）」という言い方をする。家畜の姿が見えなかったし，レモンすら見ることがなかった。作物（alimenti），建築資材など，ほとんどすべての物財が，モロッコからやって来る。水だけは海水から精製しているが，飲料水とはならない水で，これもまた，観光客が増大すれば不足することは必至である。また“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”への新たな観点として，“先住性（indigeneità）”について，国際共同研究とブラジルへの旅についても話し，帰国後すぐに書くべき MEPES の記念誌への寄稿についても話す（Il lavoro communitario: testimonianza di una visita al MEPES, agosto 1996, Vitória, Anchieta, Guarapari, Alfred Chaves）。」

2019 年 3 月 19 日（火）　メリリャ―［空路］―

マラガ―［陸路］―アルヘシラス

「6時半に朝食をとり，7時にOmar氏の父上に迎えに来てもらい，空港へ。空港近くには，病院，軍事基地（Base Alfonso XIII），動物園，食肉用の家畜の加工場などが集まっている。郊外に新たな兵舎をつくっているのは，市内の兵舎跡地に新たな家を建設するためだという。マラガ空港から，チャーターした車でコスタ・デル・ソルをアルヘシラスに向けて走る。過度に観光開発された町並みがつづく。あらためて，サルデーニャの観光開発がそれでもまだ景観を保つものであったことがわかる。」

“メリリャからアルヘシラスへと移動するなかで，およそ以下のようなことを考える。メリリャには，長い時間かけてつくられてきた“共存・共在の智（saggezza di convivenza, wisdom of coexistence）”の蓄積があった。キリスト教徒，ユダヤ教徒，イスラム教に加えて，18世紀頃からはジプシーの文化，さらにはヒンドゥーの文化が入り込み，すでに20世紀初頭には，ガウディとともに仕事をしたメリリャ出身の建築家Enrique Nietoにより，モダニズム建築の町並みがつくられていた。”

“Nietoの設計による，モスクやシナゴーグも建てられていたが，これは，20世紀初頭にはすでに，メリリャにおいては，ユダヤ教徒やイスラム教徒がメリリャ社会に組み込まれ，階層的にも中上層となっている一族がいて，“異質性の衝突・混交・混成・重合によってつくられるコミュニティ（comunità composita dalla collisione, dalla mescolanza, dall’ibridazione e dalla polimerizzazione dell’eterogeneità, composite community by collision, mixing, hybridisation and polymerisation of heterogeneity）”，“異質性の複合・重合体と成りゆくコミュニティ（community becoming composite, comunità diventando composita）”であったことを示している。”

“メリリャの後背地となっているリーフ地方における植民地戦争で戦死した人たち（「先住民兵士」とされる人たち）を「英雄」とすることが，きわめて重要な意味を持っており，長い時間をかけてつくられてきた“異質性を含み混んだコミュニティ（comunità composita con eterogeneità, composite community with heterogeneity）”の集合的アイデンティティとなっている。他方で，旧市街地のはずれに建設された共同墓地の近くから広がる丘陵地には，モロッコ風の色彩の建物が多くなり，20世紀後半頃から流入してきたモロッコ人のニューカマーたちの家となっている。そしてこのニューカマーとは異なるかたちで，すでに植民地戦争以前からメリリャに移入し，多文化に適応してきた人々（ベルベル族，サハラ以南のアフリカ系，中東から移動してきたアラブ人，ロマ，ヒンドゥーなどを含む）の“先住性（indigenità, indigeneity）”をもったオールドカマーとは異なるうごきをしていることが推定される。”

“「あたり屋」と遭遇した地区の音，匂い，ひとの所作，視線，空気感を想起すること。”

2019年3月20日のアルヘシラスとジブラルタル，3月21日と22日のセウタは，稿をあらためて“サルベージ”を行うこととして，アンダルシア地方における実質的な最終日（移動日）である3月23日について，以下に記述する。

6　2019年3月23日アルヘシラスでの対話

2019年3月23日（土）　セウタ―［海路］―アルヘシラス―［陸路］―マラガ―［空路］―パリ―［空路］―羽田

「朝4時前に起き出して，5時前にホテルを出て港へと向かい，唯一の運航便である大型船に乗り込む。強風と荒浪のなか，船は大波をかきわけ進み，午前6時，無事にアルヘシラスに到着する。これまで地中海，大西洋，南米などへの“旅”では，メルレルと新原のフィールドワークの方法

について熟知しているサッサリの旅行代理店のSatta氏が，すべての宿，交通手段の手配をしてくれている。今回も，それぞれの地域の開発や観光の状況を理解することに適したホテルや交通手段を考えてくれていた（たとえばランペドゥーザでは市長の一族が経営するホテルをおさえてくれたことで，各種の情報が集まり，市長にもコンタクトをとることが出来た）。しかしながら，そのSatta氏ですら，西地中海の強風については熟知していなかったことになる。」

「3月21日に予約していた9時半の船は，強風のため欠航，10時半，11時，13時と，船は次々と欠航となった。当初予定していたフェリー会社を変更して，より大きな船に上船する可能性，セウタからモロッコのタンジェに上陸し，車でセウタへと移動する可能性などを検討する。欠航に慣れた乗客たちはさほど浮き足立つこともなく，情報を待っていた。まだ冷たい強風が吹くこの季節に，唯一運行可能な船は，14時発のPassiò per Formentera（全長100m，800人収容，速度22ノット）だということがわかる。12時過ぎに運行決定を確認し，チケットを切り替えて，乗船を待つしかなかった。」

「ターミナルで待つこと計5時間，乗船の手続きが始まったが，荷物のチェックは，飛行機なみに厳しく，厳格に行われる（マラガ空港のチェックもたいへん厳しく，時間がかかったが）。船内の椅子は，たいへん大きく立派なもので，それぞれの座席にシートベルトが装備されていたのだが，その意味はすぐにわかった。外海に出ると，さらなる強風で波は相当の高さとなっており，立ち上がって歩くことは困難をきわめた。船内を見回ろうとすると，すぐに吐き気をもよおし，大きな椅子にもどり，シートベルトを締めて体勢を保つしかなかった。どうにか船はセウタへと辿り着いたが，強風が続き，予約していた帰りのフェリーが欠航となる可能性がきわめて高いことから，セウタ滞在中ずっと，アルヘシラスにもどる複数の方法を検討しなければならなかった。滞在中も何度か港へと通い，予約していたチケットを放棄し，大型船の予約を待たねばならなかった。長い時間待ち，夜遅くになって，どうにか翌朝5時の大型船のチケットを確保した。ホテルで数時間の睡眠をとり，4時にタクシーを予約し，翌朝早くの移動に備えるしかなかった。」

「この体験は，鈴木や新原よりも，はるかに地中海の環境を理解しているであろうと思っていたメルレルやSatta氏にとっても想定外のことであるという新たな発見があった。過去のフィールドワークでは，カーボベルデは乾燥と強風，アゾレスは多湿で強風だった。メリリャより，アルヘシラスとセウタははるかに強風であり，あらためて，大西洋への「玄関」であるジブラルタル海峡の意味を体感として学ぶ機会となった。アフリカ北西の西サハラの対岸で，カナリア諸島近くにあったボジャドール岬を越えて航海することが，15世紀ヨーロッパの航海者にとっては，世界の“端／果て（punta estrema/finis mundi）”を旅することであった（新原 2000）。季節によっては荒れた時期があるとはいえ，エーゲ海やアドリア海，ティレニア海という地中海の内界とは異なる風と海を想起させるものであった。今回のアンダルシアでのフィールドワークは，地中海への新たな理解をもたらした。」

「毎回の旅／フィールドワークでSatta氏が手配してくれるホテルから，地中海・大西洋の観光と開発の状況を理解することも出来る。マラガのホテルは，騒音や，フロントの対応など，小さな問題はあったが，アルヘシラスのホテルの機能不全（最新式で電源が多く，パソコンを使えるテーブルがあるが，暖房は動かず，窓はがたつき水漏れと騒音がひどい）はその比ではなかった。地理的には，アフリカのなかにあるメリリャのホテルのみが，伝統的なヨーロッパ式のホテルで，設備は少し古いが，手入れが行き届き，フロントのスタッフの教育もきちんとなされていた。言語的に

も，メリリャのホテルでは，レストランのスタッフはスペイン語のみでの会話を続けたが，フロントのスタッフは，多言語への対応をなんとかしようとしていた。他方で，マラガのホテルは，スペイン語以外は，それほど訓練を受けていない英語での対応のみで，多言語（イタリア語やドイツ語など）に対して，対応する意志そのものを欠いていた。皮肉なことに，メルレルが大切にしてきた「ヨーロッパ的なるもの」，すなわち他者の異質性を認めたうえで，なんとかコミュニケーションを図ろうとする姿勢は，むしろグローバルな観光地化の文脈で新規につくられたホテルの側では失われてしまっている。」

「こうしたことを夢想しつつ，予定よりかなり早くにアルヘシラスの港に着いてしまい，あらかじめ予約していた送迎車を待つという「僥倖」を生かすかたちで，2時間ほどかけ，今回のフィールドワークの意味をふりかえった。」

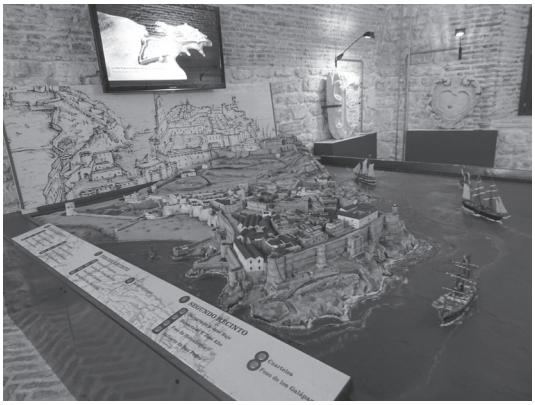
「セウタとメリリャが，“衝突と出会い（scontro e incontro）”により，“社会文化的な島々（isole socio-culturali）”が形成されてきたこと，その内実をひとつひとつていねいに理解し，比較することの必要性を感じる。」

“セウタは，ローマ帝国以来，イスラム，ポルトガル，スペインと支配者が変わっても，ずっと都市だった。ローマ帝国の時代には，魚の加工工場があった。カルタゴとの戦争以降は，兵士がいる必要はなくなり，要塞は山側にあった。北アフリカのリーフ地方に位置するメリリャでは，要塞は海に面しており，その周りに人が住む場所がつくられ，18世紀頃に都市になった（写真㉒）。”

“メリリャも移民・難民の問題を抱えている。リーフ地方からの先住民（Regulares Indigenas）に加えて，モロッコからの新移民，サブサハラ（サハラ砂漠以南の地域）からの黒人，シリアやイラクなどからの難民と，異なるかたちの異質性を抱えている。”

“地中海における要衝の地で，“衝突”の象徴である要塞と兵舎によって，「飛び地（enclave ed exclave）」が構成されていくのと同時に，城門の跳ね橋付近の境界領域では，“混交・混成・重合”の社会文化的プロセスが立ち現れる。「飛び地」のなかにはまた，いくつもの“社会文化的な島々”がつくられ，メリリャのように，すでに一定の中長期的な時間の流れによって形成された“異質性の衝突・混交・混成・重合によってつくられるコミュニティ（composite community of heterogeneities）”が存在している。この領域が一定の定常性を維持しつつ，外部からの介入によって揺り動かされ続ける歴史として現在をとらえることが出来る。”

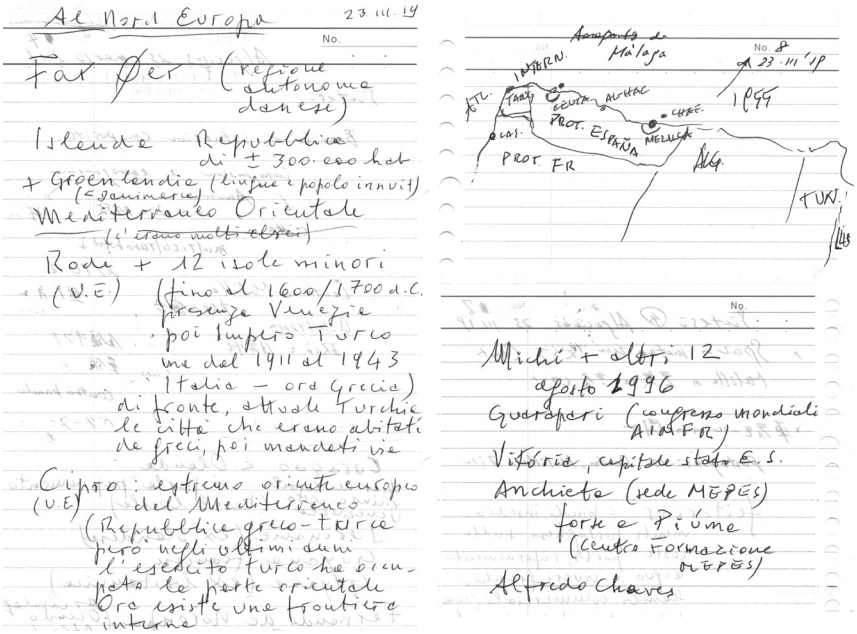
写真㉒　メリリャの要塞部分のジオラマ



“ジェノヴァ人は，地中海の西端から黒海（ウクライナ）まで進出していた。イヌイットの土地であるグリーンランド（アルヘシラスもアラビア語ではterra verde，緑の土地すなわちグリーンランドである）をデンマークは征服した。そしてロシアの影響がある。島はかつては，より社会文化的な意味を持っていたが，現在では，地政学と主権の対象となっている。”

“2018年はランペドゥーザというチュニジア対岸のヨーロッパへの「玄関口」，2019年はセウタとメリリャ，ジブラルタルという西地中海の「飛び地」のミクロな現実を見た。今後は，大きな視点で比較を行う必要がある。テーマは，“対話

写真㉓　メルレルの実際の手書きメモ



的／対位的なフィールドワーク（ricerca sul campo dialogante e poli/disfonico）”による“社会文化的な島嶼性（insularità socio-culturale）”の理解からの“共存・共在の智（saggezza di convivenza, wisdom of coexistence）”の探求である。フィールドとしては，中南米，北海，地中海といった可能性が考えられる。”

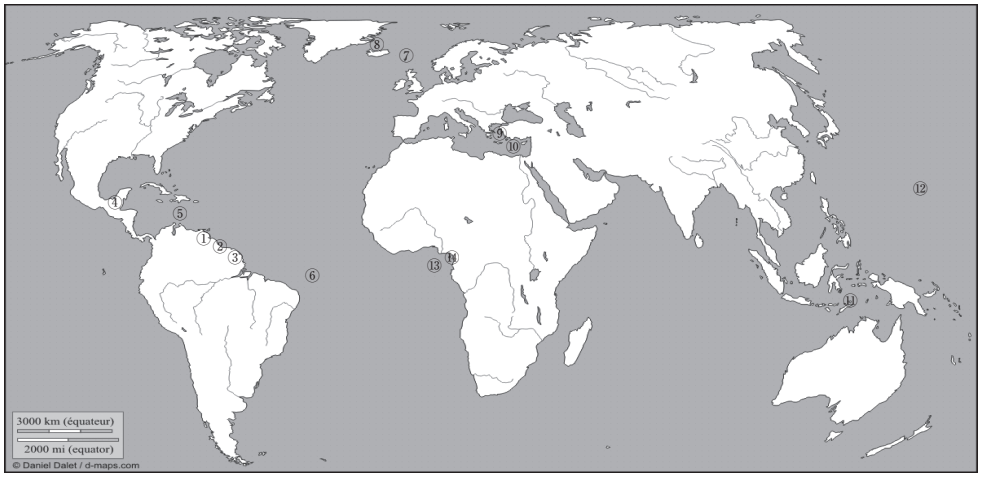
“具体的には，“異質性の複合・重合体と成りゆくコミュニティ（community becoming composite, comunita diventando composita）”，あるいは“異質性の衝突・混交・混成・重合によってつくられるコミュニティ（composite community of heterogeneities）”という観点から，ガイアナ，スリナム，フランス領ギニア，ベリーズ，オランダ領キュラソー（Curacao），フェルナンド・デ・ノローニャ，フェロー諸島，アイスランド，ロードス，キプロスなどの“社会文化的多重性（multiculturalita）”と比較可能だ。ミクロネシア，東南アジアなど，東ティモール，グアム・サイパンのチャモロ族などもフィールドとする可能性がある（写真㉓）。”

“主権ではないかたちでの社会文化的な「飛び地」と“共存・共在の智”という観点では，サントメ・プリンシペのポルトガルの商館（Feitorias），赤道ギニアのビオコ島（Bioko，旧名フェルナンド・ポー島（isla de Fernao Po, Fernando Po or Fernando Poo）などから考えてもよいだろう。サントメ・プリンシペは外からの入植者だったが，フェルナンド・ポーは入植者と先住民が混在・混交していた。この観点から，1996 年 8 月に 12 人のサッサリからのイタリア人メンバーとともに行ったブラジル調査（Guarapari, Vittoria, Anchieta (sede MEPES), Piume (centro formazione MEPES), Alfred Chaves）をふりかえることもできるだろう（地図⑦）。”

“ポルトガルの航海者と「飛び地」，アフリカ，インド，アジアの「飛び地」とサルデーニャの「飛び地」と，“受難者／受難民（homines patientes）”の「引き揚げ」の比較研究も可能だ。”

「予定の時間に，マラガ空港までの送迎車の運

地図⑦　アルヘシラスでの対話に登場した世界各地の“境界領域”



①ガイアナ, ②スリナム, ③フランス領ギアナ, ④ベリーズ, ⑤オランダ領キュラソー, ⑥フェルナンド・デ・ノローニャ, ⑦フェロー諸島, ⑧アイスランド, ⑨ロードス, ⑩キプロス, ⑪東ティモール, ⑫グアム・サイパン, ⑬サントメ・プリンシペ, ⑭赤道ギニアのビオコ島（旧名フェルナンド・ポー）

転手と出会い，マラガ空港へと向かう。マラガ空港でもメルレルと少し話した後，先に飛行機に乗り込み帰路につく。」

7　おわりに―― COVID-19 以降の人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークにむけて

本稿では，フィールドに出られないフィールドワークという状況下で，フィールドワークの“想像／創造力”と組み合わせ，さらに，COVID-19 以前に行ったメリリャでの調査に即して，フィールドワークの“サルベージ”を試みてきた。最後に，本稿での“問いかけ”に立ち戻りたい。

> フィールドに出られないという経験，「壁」の増殖”と“パンデミック”のなかで，どのような過去の“対話的なフィールドワーク”の“サルベージ”によって，COVID-19 以降の人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークを構想し得るのか？

メリリャでの“対比・対話・対位しつづける（comparing dialogically and contrapuntally）”フィールドワークは，以下のような「質」を持っていた。空港からのタクシーの運転手とまず話し，続いて投宿先のホテルの受付の担当者と話す。投宿先のホテルは，ホテルとしての性格のみならず，ロケーション，歴史なども考慮して選び，その投宿先から，市街地を歩いて理解していくことから始める。

ここからホテルの外に出て，市街地を自分の足で歩き，フィールドワークの〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・かんがえ・ともにかく〉という一連の動作に入る。一貫して，行うべきデイリーワークは，「景観」の背後に在る“構造／情動（汗や想い）”を掬い取るという「作業様式（modus operandi）」[23]である。メルレルからの薫陶で，建築様式や果樹などの植えられ方，歩道の作られ方，水の作られ方，土地利用や生業の様子などに着目しつつ，歩いて行く[24]。そこには，地図を持って歩き，気がついたことを地図に書き込み，直接誰かと話をする以前に，都市の内

なる社会文化的な境界線を見分けていくことの意味があった。ヨーロッパの都市や，ヨーロッパの外につくられたアゾレスやカーボベルデなど都市を見ていくことで，メリリャの場合でも，メルレルも気がつかなかった境界線に気付くことも出来た。その意味でも，メルレルとの間で積み重ねてきた「旅をして，出会い，ともに考える」というやり方（ways of exploring）は，より水平的で相補的であり，相互作用による“創造的プロセス（the creative process, il processo creativo）”となってきている。

旅行案内書でも，担当者の“背景（roots and routes）”を意識しつつ，話を聞く。そしてここから，メリリャの起点となっている要塞のある地区内にある歴史学・考古学・民俗学博物館へと向かい，翌日は共同墓地へと向かった。メリリャでは，ガウディの弟子の一人であったエンリケ・ニエトの手によるモダニズム建築や，キリスト教，イスラム教，ユダヤ教，ヒンドゥー教の寺院などが注目される。そのなかでも，博物館と墓地を丹念に見ることの意味は，これらの場所には，メリリャ（人）の自己理解・自己表出の在り方（ways of being）をよみとることができるからである。

その結果，長い時間をかけつつ創りあげられてきた“異質性の衝突・混交・混成・重合によってつくられるコミュニティ（composita comunita dalle eterogeneita）”と，そのような“場（place, space, place, site, case, circumstance, moment, condition, situation ）”を守り育てるための闘いとしてのリーフ戦争という描かれ方をみてとった。「あたり屋」との遭遇や国境検問所での出来事は，フィールドワークにおける危険との出会いでもあった。

メリリャでのフィールドワークの「実」の部分は，実際に〈あるき・みて・きいて〉であることはまちがいない。しかし，それと同時に，行く前の 2018 年 8 月 6 日の対話，現地での食事時や移動中の対話と，そこで生み出された想念や言葉の“対話的エラボレーション（dialogic elaborations, elaborazioni dialoganti）”こそが重要であったことが，フィールドノーツの“隙間を埋める（caulking, calafatare）”という今回の「作業様式（modus operandi）」によってわかってくる。このエラボレーションは，メルレルと新原との二者関係にとどまらず，ことなる二者三者の間でも，“多系／多茎”の拡がりを持っていくものである。

メリリャ調査をふりかえるなかで準備をすすめた新原道信編『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』（ミネルヴァ書房，2022 年）では，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」以降のフィールドワークの在り方（ways of being）について考察した[25]。刊行された本では公開していないが，英語とイタリア語のタイトルの考案を，声をかけあいながら，“ともに（共に／伴って／友として）創ることを始める（iniziare a co-creare, begin to co-create）”試みとして行っている。ニューヨーク・ハーレムでの長期のフィールドワークから智を紡ぎ出した中村寛と，トリエステ・イストリア半島での“共存・共在の智（saggezza di convivenza, wisdom of coexistence）”に出会った鈴木鉄忠に，それぞれ，英語とイタリア語での「人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク」の表現方法を考えてもらい，“対話的エラボレーション（dialogic elaborations, elaborazioni dialoganti）”を試みた。これが現段階での，「人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク」の英語とイタリア語版ということになる：

Fieldwork: Toward Comprehending the Becomings of Human and Society

Entrare in campo : comprendere le metamorfosi dell'uomo e della società

ここでは，人間と社会の“うごき（nascent moments/processes, momenti/processi nascenti）”をどうとらえるかが焦点となる。中村は，近年の「存在論的転回」のなかで，becoming（生成変化）

という概念が浸透してきていることに着目した。その他の選択肢としてdynamicsも考え，Fieldwork: Comprehending the Dynamics of Human and Societyの可能性も考えた。鈴木は，メルッチが，“かたちを変えつつうごいていく（changing form/metamorphose, metamorfosarsi）”ことを重視したことに敬意を払い，metamorfosiを配置した。

イタリア語では，Fieldworkという英語表現は定着しておらず，メルレルも，ricercaあるいはviaggioという表現を使っている。長期にわたる“コミュニティを基盤とする参与的行為調査（Community-Based Participatory Action Research (CBPAR)）”を行った『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』（新原 2016a）では，Fieldworkをcampo di azione（行為の場）という表現をしたが，今回は，より広い意味でのフィールドワークであるので，ただフィールドに入って行く（entrare in campo）という表現とした。

Becomingは，ドイツ語だとwerdenがしっくりくる。イタリア語／ラテン語の直訳だと，divenire（下に降りてくるの意で哲学用語の「生成」でもある）となる。イタリア語現在分詞のnacenteは，F. アルベローニ（Francesco Alberoni）が提起した「未発の状態（statu nascenti）」を念頭においている[26)]。

こうしたことを考えると，哲学の理解では「存在と生成（l'essere e il divenire）」となるが，メルレルとの実際の歩みのなかからの理解としては，“破局へと至る瓦礫（andare in rovina）”さらには“瓦礫の出現／出現した瓦礫（rovine emergenti, emerging ruins）”も含めた“多系／多茎の可能性（the possible routes to the various alternative systems）”をもつ“未発の状態（stato nascente, nascent state）”がゆらぎ，動的均衡の状態からどこかに“うごき始める”となる。その場合の“うごき”のとりわけ「始まり（beginnigs）」の状態，そのような場を表す言葉として“うごき”を定位することを考えている。

いまの訳語としている“うごき（nascent moments/processes, momenti/processi nascenti）”は，総観的な見方（synoptic view）による言葉となっている。他方で，“低きより（humility, humble, umiltà, humilisをもって，高みから裁くのでなく，地上から，廃墟から）”，その場に“居合わせる（being there by accident at the becomings in which critical moments take place）”かたちでは，訳語は，“うごき（becomings, divenire）”となる。

長期にわたって“低きより”のフィールドワークの試みをとりまとめた『うごきの場に居合わせる』においても，新原と中村寛との間でなされた言葉の“対話的エラボレーション（dialogic elaborations, elaborazioni dialoganti）”の記録を掲載している（新原 2016a: 523-546）。“対比・対話・対位しつづける（comparing dialogically and contrapuntally）”という点では，メルレルとの間であれ，（『うごきの場に居合わせる』のフィールドでの奮闘を長期にわたりともに体験した）中村や鈴木との間であれ，フィールドでの“化学反応／生体反応（reazione chimica/vitale）”を言葉として「再発見」するという側面があった。

だとすると，“フィールドワークの再発見”となるような“サルベージ”は，「海図」なき「海」に漕ぎ出て，土地や人と出会い，本稿2章で提示した「言葉の海の真珠とり」と成ることへと還ってくる。

すなわち，“サルベージ”は，かつて手探りで身体をゆらめかせた「海」に再び我が身を投じ，「再会」によって生まれた理解のかけらを岸辺に持ち還り，「同じキャンバスの上に何度も絵の具を塗っていく」ような営みである。

ここから，COVID-19以降の人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークについて，現時点での理解をまとめておきたい。

人間と社会の“うごき（becomings, metamor-

fosi)”を“感知し（perceiving/sensing/becoming aware, percependo/intuendo/diventando consapevole)”，“感応する（responding/sympathizing/resonating, rispondendo/simpatizzando/risonando)”ようなフィールドワークにおける〈エピステモロジー／メソドロジー〉，すなわち visione の要素は，これまでメルレルとともに錬成してきた“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale)”となろう。

〈メソッズ／データ〉，すなわち arte の要素は，メルレルの言い方では，“旅をして，比較／対話し，ともに考え／自らうごいていく（viaggiare, confrontarsi/dialogare, pensare insieme/agire autonomamente)”“対話的にふりかえり交わる（facendo riflessione e riflessività)”，新原の言い方では，“かたちを変えつつうごいていく（changing form/metamorphose, metamorfosarsi)”“対話的／対位的なフィールドワーク（dialogic and poly/dis-phonical Fieldwork)”となろう。この visone と arte を“織り合わせ”，“塑造・造形”しつつあるのが“うごきの比較学”である。

最後に，本稿冒頭のメルレルとの“対話的エラボレーション（dialogic elaborations, elaborazioni dialoganti)”からの言葉にもどりたい。

メルレルと新原は，「思考」のみならず「惑星地球という生身の存在に深く根をおろし」た「身体」を「揺りうごかして」[27]，“人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク（ricerca in campo per comprendre le metamorfosi dell'uomo e della società, fieldwork for understanding the becomings of human and society)”を練り上げてきた。それはまた，“旅する生／生を旅する（la vita viaggiando/viaggiando la vita)”デイリーワーク（“不断／普段の営み（movimenti continui e quotidiani, continuous and daily works)”）であり，“フィールドワークを生きる（living Fieldwork, vivere nel campo della vita)”ことであった。

伊波普猷の「深く掘れ 己の胸中の泉」という言葉のように，“固有の生の軌跡（roots and route of the inner planet)”としての“旅（explorations, esprorazione, itinerarium)”を“サルベージし（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとり)”，“衝突・混交・混成・重合の歩み（percorso composito, composite route)”によって練り上げられた「複合し重合する私（io composito)」をこころおきなく出す瞬間（momenti）に訪れる“創造的プロセス（the creative process, il processo creativo)”でもあった。

それゆえ，“サルベージ”は，「追憶のフィルターとレンズによって，私たちのなかに深く根付いた生身の現実の意味を学び，問いを発する（Così impariamo a interrogarci con questo filtro e con questa lente, sul senso della realtà cruda che si radica, pur attraversando i confini consueti)」営みとなる。

“境界領域を生きるひと（gens in cumfinis)”は，「厳格に存在していたかのように見える『境界線』をあまり気にすることもなく，いまとなっては慣れ親しんだ境界の束をこえていく（poco o per nulla rispettoso delle definizioni rigide di ciò che consuetudinariamente si ritiene sia “confine”, inteso come frontiera)」。そして，「自らの旅の道行きで獲得した固有の見方に従いながら，いくつもの異境を越え，「厳格な境界線」の限界を抜け出ていく（Ciò permette di attraversare i confini e vivere oltre quei limiti, ricomponendo soggettivamente la propria visione di sé stessi)」。

この visione が，“社会文化的な島々（isole socio-culturali)”から，人間と社会の“うごき（becomings, metamorfosi)”をとらえるメルレル（と新原）の「固有の見方（propria visione)」であり，“異境の力（異なる境界線の引き方，補助線の引き方を提示することでメタモルフォーゼを誘発する力)”である[28]。

1） 同論稿では，サルデーニャ出身の思想家A. グラムシ（Antonio Gramsci），精神病院の廃止と地域での精神医療を主導したF. バザーリア（Franco Basaglia）やイタリアのエコロジー・平和運動の導き手だったA. ランゲル（Alexander Langer）たちに言及した（Basaglia 1998 [1968]; 2000）（Parmegiani e Zanetti 2007 = 2016）（Langer 2011 [1996]）。

2） サルデーニャの文化人類学者A. ピリアル（Antonio Pigliaru），M. ピラ（Michelengelo Pira），G. アンジオーニ（Giulio Angioni）などにも言及している（Pigliaru 1975; 1980; 2006; 2008; 2011）（Pira 1978; 1981; 1985）（Angioni 1982; 1984; 1989; 2015）。

3） メルレルの“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”，“島嶼社会論（visione della società insulare, vision of insular society）”については，（Merler 1989; 1990; 1991; 1996; 2003a = 2004; 2004 = 2006）（Merler e Niihara 2011a = 2014; 2011b）（新原 1992; 2014b）などを参照されたい。

4） メルレルの〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ〉は，“よりゆっくりと，やわらかく，深く，耳をすましてきき，ささえ，たすける（lentius, suavius, profundius, audire, audere, adiuvare）”ことを基本として，“奇偶”と“機縁”，偶然出会った断片的事実，土地とひととの特定の関係性を大切にしてきた。自然に集積していく「断片」的な事実の意味，一見隔絶されているように見える他の小さな場の意味を，ことなる旅の経験をもった同伴者と“対話的にふりかえり交わる（facendo riflessione e riflessività）”ことで，少しずつ，ひとつの世界理解として形にしていくというものである。詳しくは，（新原 2009a; 2014c）を参照されたい。

5） “境界領域（cumfinis）”とは，いくつもの多重／多層／多面の「境界（finis）」が“衝突・混交・混成・重合”しつつ「ともにある（cum）」場であり，—(1)“テリトリーの境界領域（frontier territories, liminal territories）”，(2)“心身／身心現象の境界領域（liminality, betwixst and between）”，(3)“メタモルフォーゼの境界領域（nascent moments）”という三つの位相から考え，知見を蓄積してきた。とりわけ着目したのは，“臨場・臨床の智”が立ち上がる瞬間，つまりは，“メタモルフォーゼ（changing form/metamorfosi）”が萌芽する瞬間である（新原 2019c: 160-161）。

メルレルとの世界各地の“境界領域（borderland/limit-situation, zona di confine/territorio limitrofo）”でのフィールドワークについては，（新原 2014a; 2019c; 2020a）などを参照されたい。

6） メルレルと新原の島嶼社会論（visione della società insulare, vision of insular society）”と〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉による“コミュニティを基盤とする参与的行為調査（Community-Based Participatory Action Research (CBPAR)）”の“対話的エラボレーション（dialogic elaborations, elaborazioni dialoganti）”の歴史については，（Vargiu, Chessa, Cocco and Sharp 2016）などで紹介されている。

7） これまでの世界各地の“境界領域”のフィールドワーク，さらには“惑星社会のフィールドワーク（Esplorando ricerca sul campo nella società planetaria）”については，（新原 2019a; 2020b; 2020e）などでふりかえっている。

8） デイリーワークとしてのコミュニティ研究を，日本とイタリアそれぞれで行い，その知見からの“対話的エラボレーション（dialogic elaborations, elaborazioni dialoganti）”を続けてきた（新原 2016a; 2019a）（Merler e gli altri 1982）（Merler, Giorio e Lazzari 1999）（Merler & Vargiu 2008）。在住外国人の子どもたちが多数暮らす公営団地をフィールドとした「湘南プロジェクト」と，“移動民の子どもたち（children of immigrants）”のネットワークを対象とした「聴け！プロジェクト」で，10年以上にわたる“参与”によって，異質性が衝突・混交する「網の目」の把握を試みたものである。現在は，立川・砂川地区で同様の“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community-Based Participatory Research (CBPR)）”に取り組んでいる。

9） 2018年3月のランペドゥーザでのフィールドワークについては，『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』第2章の拙稿「イタリアの“国境地域／境界領域”から惑星社会を見る—ランペドゥーザとサンタ・マリア・ディ・ピサの“臨場・臨床の智”」（新原 2019c）および「願望のヨーロッパ・再考—「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク」（新原 2020d）において，フィールドノーツにもとづく詳細な紹介をしている。その他，ランペドゥーザについては，ドキュメンタリー映画『海は燃えている（Fuoco Ammare，監督：

Gianfranco Rosi，2016年イタリア)』や，海外ドキュメンタリー「死の海からの脱出（Aquarius Rescue in Dead Waters，制作：Point du Jour，2016年フランス，BS1，2017年9月12日放送)」や，（Bartolo e Tilotta 2017）（北川 2010, 2012, 2018）（眞城 2017）（南波慧 2017）などがある。

10） 2017年3月と2018年3月の石垣・宮古の調査については，（新原 2018；2019b）においてその一部を紹介している。

11） 拙稿「願望のヨーロッパ・再考―「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク」（新原 2020d）においては，“「壁」の増殖（proliferation of ‘barrier’)”の観点から，一部2019年3月のメリリャ，セウタ，ジブラルタル，アンダルシア地方でのフィールドワークからの所見を紹介している。メリリャ調査については，その成果の一部を，新原道信「惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“臨場・臨床の智”に向けて―“惑星社会のフィールドワーク”は現代社会認識に寄与するのか」（新原 2020b）で紹介している。メリリャ，セウタについては，（Novosseloff et Neisse 2007 = 2017: 265-293）でも紹介されている。

12） “比較学（Comparatology)”は，comparative study でも，comparative method（ology）でもなく，個々の科学の境界を横断し，異なる境界線の引き方，新たな比較（対話）可能性を提示する。既知の分類による属性の比較にとどまらず，別ものとされたもの同士の“未発の状態（nascent state)”に着目し，関係性のうごき（nascent moments of relationship)，すなわち〈関係性の（在り方そのものが変化していく社会文化的）プロセスを比較（対話）のなかで感知する智（“cumscientia”for perceiving the dynamism，puls，rhythms，roots and routes of relationship)〉である（新原 2017b)。

13） 歴史上体験したことのない速度での今日の“パンデミック（語源的にはギリシア語の pandemos，すべての［pan］民衆［demos］が直面する事態を意味する)”は，惑星地球（the planet Earth）というひとつの「船」の内側で，局所的な出来事の影響がきわめて短期間に惑星地球規模に伝播・拡散してしまう惑星社会（planetary society）の特質とつながっている。「新型コロナウイルス感染症（COVID-19)」は，現にそこに「居る」にもかかわらず，マジョリティの“選択的盲目（現実から目をそらす性向)”により看過してきた「移民・難民，外国人労働者との『壁』の問題」という“生身の現実（realtà cruda, raw reality)”の存在を意識させることになる。

14） 新原の共同研究者であったA. メルッチ（Alberto Melucci 1943-2001）は，現代社会の特徴を以下のように述べている：

> 私たちは，グローバル社会となった惑星で生活している。それは，外部の環境および私たちの社会生活そのものに介入していく力によって，完全に相互に結合していく社会であるが，しかし依然として，そのような介入の手が届かない本来の生息地である惑星としての地球（the planet Earth）に拘束されているような社会でもある。社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界という，惑星としての地球の二重の関係は，私たちがそこで私的生活を営む“惑星社会（the planetary society)”を規定している（Melucci 1996 = 2008: 3)。

15） これは，『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』の“基点／起点（anchor points, punti d’appoggio)”ともなる「そもそも」フィールドワークをしてよいのか？」という“問いかけ”であった（新原 2022b: 8-10)。

16） “惑星社会のフィールドワーク（Exploring Fieldwork in the Planetary Society, Esplorando ricerca sul campo nella società planetaria)”については，（新原 2016b; 2020c; 2020e）などを参照されたい。

17） “サルベージ（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる)”については，下記のE. サイード（Edward W. Said）の言葉からの示唆が大きい：

> 「そもそも，権力とは縁のない状態のままで，嘆かわしい事象の一部始終をつぶさにみてとる現場証人となることは，けっして単調で退屈なことではないだろう。このようなことをするには，かつてミシェル・フーコーが『仮借なき探究』と呼んだものをおこなわねばならない。すなわち，オールターナティヴな可能性を垣間見せる材源を徹底して探しまわり，埋もれた記録を発掘し，忘れられた（あるいは廃棄された）歴史を復活させねばならない。」（Said 1994 = 1998: 23-24）

18） バルト海の島オーランド，大西洋の島嶼社会カーボベルデなどについては，複数回にわたって，フィールドワークの“サルベージ（渉猟し，踏破し，掘

り起こし，掬い／救いとる）”を行い，新たな体験との比較・対話による再解釈の歩み（changing form/metamorphose, metamorfosarsi）を公開してきた（新原 2006; 2014d）（新原 2009a; 2012b; 2014d; 2016f）。

19） これは，『事典　哲学の木』に掲載された「旅」の項目で提示した文章だが，“方法としての旅（il viaggio come una epistemologia/metodologia）”については，拙著『ホモ・モーベンス―旅する社会学』（新原 1997a）と『境界領域への旅―岬からの社会学的探求』（新原 2007）を参照されたい。

20） メルレルと新原が，この土地を理解していく際に，メルレルの初期の弟子であるG. スカルフォ（Grazia Scarfo）の存在も大きい。スカルフォは，パリのP. ブルデュー（Pierre Bourdieu）のもとで博士号をとり，フランスで家族社会学の著書を刊行した後，同じくブルデューを指導教授として博士学位を取得したモロッコ人研究者と結婚し，現在はモロッコの首都ラバトで，グランゼコールの社会学教授をしている。新原との間では，1988年にサルデーニャでの地域調査をともにした後，サルデーニャの港町でアラゴンに征服された歴史からいまでもカタルーニャ語圏となっているアルゲーロが故郷であるスカルフォが，「サルデーニャへの里帰り」をした際に，何度かサッサリにて再会し，その際に断片的にモロッコの話を聞かせてもらっていた。断続的ではあるが連絡をとりあい，2021年6月には，モロッコのエリート家族の移動・結婚等の戦略についての新著が完成間近との連絡をもらっている。そのスカルフォが，結婚してすぐにフランスからモロッコへと移住した際に，まず暮らし始めたのがアルセマスだと言う。

21） このとき念頭においていたのは以下の言葉である：

> 地中海は〈ひとつの〉海（une mer）ではなく，「海の複合体（《complexe de mers》）」なのだ。いろいろな島があり，いろいろな半島で切断され，さまざまな海岸に囲まれた海から成っている。その生活は地上と関わっているし，海のポエジーは半分以上農村的であり，地中海の船乗りたちは季節によっては農民である。地中海は，艪で漕ぐ小さな舟や商人の丸い貨物船であると同時にオリーブの木やぶどうの木のある海である。
>
> ……民族誌学者，地理学者，植物学者，地質学者，科学技術者……によって書かれた，膨大な数の……［先行］研究の関心は，広大な海にあるのでなく，海のモザイクをなす特定の小さなタイルであり，……私が関心を抱いている緩慢で力強い歴史の歩みとは何ら共通の尺度をもたぬ無数の雑報記事である。……研究に再び生命を与えるためには，見直しをおこない，全体にわたってゼロから始め，挑発しなければならない（Braudel 1966 = 1991: 16-17）。

22） カーボベルデ，アゾレス，リスボンなど，投宿先のホテルをあらかじめ慎重に選定し（6章を参照），ホテルの歴史，従業員の立ち振る舞いの観察，受付や給仕などとの話からも，理解を蓄積し，“対比・対話・対位”を試みてきた。

23） ブルデューの「（社会学者は自らの性向を）ア・プリオリに作業方式に作用する反射的反省性に変換する必要がある（C'est-à-dire une réflexivité réflexe, capable d'agir non ex post, sur l'opus opertum, mais a priori, sur le modus operandi）」という言葉に着想を得ている。すなわち，「後からことがらの正否を論評するのでなく，ことがらとかかわることへと自らを揺りうごかすことから始めることの出来る反射的反省性である（Bourdieu 2001: 74）。Cf.（Boudieu 2001 = 2010: 208）

24） この「作業様式（modus operandi）」，身体の実践感覚（le sense pratique）は，“思行（思い，志し，想いを馳せ，言葉にして，考えると同時に，フィールドのなかで身体とこころがうごいてしまっているという投企）”とも言い換えられる。拙著『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』の序章において実際の目や耳，鼻，皮膚感覚のうごきについて紹介している（新原 2022b: 12-19）。

25） （新原 2022a）では，“うごきの比較学”研究会のメンバーである新原道信，首藤明和，石岡丈昇，中村寛，鈴木鉄忠，友澤悠季，阪口毅，栗原美紀，大谷晃，鈴木将平を中心として執筆者を構成し，各自がこれまですすめてきたフィールドワークをふりかえり，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」以降のフィールドワークの在り方（ways of being）についての問題提起を試みた。

26） “未発の状態（stato nascente, nascent state）”については，（新原 2015b）を参照されたい。

27） この言葉の背後には，サッサリ大学の研究所FOISTの共同研究室に飾られていたA. グラムシ

（Antonio Gramsci）の下記の言葉がある：

Istruitevi, perché avremo bisogno di tutta la nostra intelligenza. Agitatevi, perché avremo bisogno di tutto il nostro entusiasmo. Organizzatevi, perché avremo bisogno di tutta la nostra forza. (da L'Ordine Nuovo, anno I, n. 1, 1° maggio 1919)

「学びなさい。わたしたちのあらゆる“智”を必要とする日が来るのだから。自らを揺りうごかしなさい。わたしたちのあらゆる熱情を必要とする日が来るのだから。ひととつらなるのです。わたしたちのあらゆる力を必要とする日が来るのだから。」アントニオ・グラムシ 1919 年 5 月

28）“異境の力”は，第一に“異境で生き抜く力（capacità di vivere oltre i confini, ability to live beyond borders）”であり，第二に，その生の意味をふりかえることによって，複数の“異郷／異教／異境（terra estranea/pagania/confini estranei, foreign land/pagandom/extraneous borders）”の地を行き来し生き抜き，尚かつその意味を理解し表現しきるという意味での，“いくつもの異境を旅する力（capacità di viaggiando nei vari confini, ability to voyage in various borders）”である。そして第三に，穴だらけで，不備や欠陥があったとしても，おおかたの予想を裏切り，「同郷人」たちをはっとさせるような新たな見方（nuova visione）を提示する力，すなわち，異なる境界線の引き方，補助線の引き方を提示することでその場の“メタモルフォーゼ（変身・変異）”を誘発する“異境を創り直す力（capacità di ricomporre i confini, capacity to recompose the 'different boundary' state）”である。Cf.（新原 2014e: 54）

引用・参考文献

Angioni, Giulio, 1982, *Sa laurera. Il lavoro contadino in Sardegna*, Cagliari: Edes.

——— (a cura di), 1984, *La ragione dell'utopia. Omaggio a Michelangelo Pira*, Milano: Giuffré.

———, 1989, *I pascoli erranti. Antropologia del pastore in Sardegna*, Napoli: Liguori.

———, 2015, *Sulla faccia della terra*, Milano: Feltrinelli.

Alberoni, Francesco, 1968, *Statu Nascenti*, Bologna: Il Mulino.

———, 1989, *Genesi*, Milano: Garzanti.

Bartolo, Pietro e Lidia Tilotta, 2017, *Lacrime di sale. La mia storia quotidiana di medico di Lampedusa fra dolore e speranza,* Milano: Mondadori.

Basaglia, Franco, 1998 [1968], *I'istituzione negata: Rapporto da un Ospedale Psichiatrico*, Nota introduttiva di Franca Ongaro Basaglia, Milano: Baldini & Castoldi.

———, 2000, *Conferenze Brasiliane*, Milano: Raffaello Cordina Editore.

Bourdieu, Pierre, 2001, *Science de la science et réflexivité: cours du Collège de France, 2000-2001*, Paris: Raisons d'agir.（＝2010，加藤晴久訳『科学の科学―コレージュ・ド・フランス最終講義』藤原書店）

Braudel, Fernand, 1966, *La Méditeranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris: Armand Colin, Deuxième édition revue et corrigée.（＝1991，浜名優美訳『地中海 I 環境の役割』藤原書店）。

Cacciari, Massimo, 1997, *L'arcipelago*, Milano: Adelphi.

Foerste, Erineu, Alberto Merler and Andrea Vargiu, 2017, "Partnership in Teacher Education: A Theoretical and Practical Analysis", in *Creative Education*, Vol. 8 No. 8.

Hall, Budd, R. Tandon, R. Munck and L. McIlrath, 2014, *Higher education and community-based research: creating a global vision*, Cham: Palgrave Macmillan.

Ianni, Octavio, 1996, A *Era Do Globalismo*, Rio de Janeiro: Civilização Brasileira (=1999, traduzione di Francesco Lazzari, *L'era del globalismo*, Padova: CEDAM)

Juan Pro, R. y R. Manuel Rivero, 1999, *Breve atlas de historia de España*, Madrid: Alianza Editorial.

北川眞也，2010「移動＝運動＝存在としての移民―ヨーロッパの「入口」としてのイタリア・ランペドゥーザ島の収容所」，『VOL』以文社，第 4 号。

———，2012「ヨーロッパ・地中海を揺れ動くポストコロニアルな境界―イタリア・ランペドゥーザ島における移民の「閉じ込め」の諸形態」，『境界研究』No. 3。

———，2018「移民たちの船の物質性とモビリティ―地中海・ランペドゥーザ島の『船の墓場』からの問い」，『観光学評論』，観光学術学会，6 巻 1 号。

Langer, Alexander (a cura di Edi Rabini e Adriano Sofri), 2011 [1996], *Il viaggiatore leggero. Scritti 1961-1995*, Palermo: Sellerio.

眞城百華，2017「地中海を渡るアフリカ難民の検討―アフリカの角の事例から」『多文化社会研究』Vol. 3。

Melucci, Alberto, 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press.（＝1997，山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民：新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店）

———, 1994, *Passaggio d'epoca: Il futuro è adesso*, Milano: Feltrinelli.

———, 1996, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press.（＝2008, 新原道信他訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社）

———, 2000, "Sociology of Listening, Listening to Sociology".（＝2001，新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域―自己決定・協働，その主体　地域社会学会年報13』ハーベスト社）

Merler, Alberto (e gli altri), 1982 *Lo sviluppo che si doveva fermare*. Pisa-Sassari: ETS-Iniziative Culturali.

——— (e G. Mondardini), 1987 "Rientro emigrati: il caso della Sardegna", in *Antropos*, n. 18.

———, 1988, *Politiche sociali e sviluppo composito,* Sassari: Iniziative Culturali.

———, 1989, "Tre idee-forza da rivedere: futuro, sviluppo, insularità", in *Quaderni bolotanesi,* n. 15.

———, 1990, "Insularità. Declinazioni di un sostantivo", in *Quaderni bolotanesi,* n. 16.

———, 1991, "Autonomia e insularità. La pratica dell'autonomia, vissuta in Sardegna e in altre isole", in *Quaderni bolotanesi,* n. 17.

——— (e M. L. Piga), 1996, *Regolazione sociale. Insularità. Percorsi di sviluppo,* Cagliari: Edes.

——— (con G. Giorio e F. Lazzari, a cura di), 1999, *Dal macro al micro. Percorsi socio-comunitari e processi di socializzazione,* Verona: CEDAM.

———, 2003a, *Realtà composite e isole socio-culturali: Il ruolo delle minoranze linguistiche*.（＝2004，新原道信訳「"マイノリティ"のヨーロッパ―"社会文化的な島々"は，"混交，混成し，重合"する」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社）

——— (con M. Cocco e M. L. Piga), 2003b, *Il fare delle imprese solidali. Raporto SIS sull'economia sociale in Sardegna*. Milano: Franco Angeli.

———, 2004, *Mobilidade humana e formação do novo povo/L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse*.（＝2006，新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程―移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」新原道信他編『地域社会学講座第2巻　グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂）

——— (and A. Vargiu), 2008, "On the diversity of actors involved in community-based participatory action research", in *Community-University Partnerships: Connecting for Change*: proceedings of the 3rd International Community-University Exposition (CUexpo 2008), May 4-7, 2008, Victoria, Canada. Victoria, University of Victoria.

——— (e M. Niihara), 2011a, "Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole", in *Quaderni Bolotanesi*, n. 37.（＝2014，新原道信訳「海と陸の"境界領域"―日本とサルデーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」新原道信編『"境界領域"のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部）

——— (e M. Niihara), 2011b, "Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina", in V*isioni Latino Americane*, Rivista semestrale del Centro Studi per l'America Latina, Anno III, Numero 5.

——— (a cura di), 2011c, *Altri scenari. Verso il distretto dell'economia sociale*, Milano: Franco Angeli.

南波慧，2017「EU国境地域における〈境域〉のポリティクス―欧州移民規制レジームの構築とチュニジア人難民」『境界研究』No. 7。

新原道信，1990「小さな主体の潜在力―イタリア・サルデーニャ島の「開発・発展」をめぐって」季刊『窓』3号，窓社。

———，1992「島嶼社会論の試み―「複合」社会の把

握に関する社会学的考察」『人文研究』21 号，千葉大学文学部。
———，1997a『ホモ・モーベンス―旅する社会学』窓社。
———，1997b「“移動民（homo movens）”の出会い方」『現代思想』vol. 25-1。
———，1998a「Over Sea Okinawans……それは境界をこえるものの謂である」『EGO-SITE　沖縄現代美術 1998』川崎市文化財団。
———，1998b「THE BODY SILENT ―身体の奥の眼から社会を見る」『現代思想』vol. 26-2。
———，1998c「境界領域の思想―「辺境」のイタリア知識人論ノート」『現代思想』vol. 26-3。
———，2000「領域」「移動とアイデンティティ」『キーワード地域社会学』地域社会学会編，ハーベスト社。
———，2002「旅」永井均他編『事典　哲学の木』講談社。
———，2003「ヘテロトピアの沖縄」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄　ディアスポラから希望へ』人文書院。
———，2004「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ―差異と混沌を生命とする対位法の“智”」廣田功・永岑三千輝編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社。
———，2006「深層のアウトノミア―オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部。
———，2007『境界領域への旅―岬からの社会学的探求』大月書店。
———，2009a「境界領域のヨーロッパを考える―移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市立大学論叢』人文科学系列，第 60 巻，第 3 号。
———，2009b「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐって―古城利明と A. メルッチの問題提起に即して」『法学新報』第 115 巻，第 9・10 号。
———，2011a『旅をして，出会い，ともに考える』中央大学出版部。
———，2011b「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ―『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21 号（通巻 238 号）。
———，2011c「“境界領域”のフィールドワーク (1) ―サルデーニャからコルシカへ」『中央大学社会科学研究所年報』15 号。
———，2011d「出会うべき言葉だけを持っている―宮本常一の“臨場・臨床の智”」『現代思想　総特集＝宮本常一　生活へのまなざし』vol. 39-15。
———，2012a「現在を生きる『名代』の声を聴く―“移動民の子供たち”がつくる“臨場／臨床の智”」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 22 号（通巻 243 号）。
———，2012b「“境界領域”のフィールドワーク (2) ―カーボベルデ諸島でのフィールドワークより」『中央大学社会科学研究所年報』16 号。
———，2013a「“惑星社会の諸問題”に応答するための“探究／探求型社会調査”―『3.11 以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 23 号（通巻 248 号）。
———，2013b「“境界領域”のフィールドワーク (3) ―生存の場としての地域社会にむけて」『中央大学社会科学研究所年報』17 号。
———（編著），2014a『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。
———，2014b「“境界領域”のフィールドワーク”から“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。
———，2014c「“境界領域”のフィールドワークの〈エピステモロジー／メソドロジー〉」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。
———，2014d「“深層／深淵”のヨーロッパ―オーランド，カーボベルデ，サルデーニャとコルシカにおける“境界領域のフィールドワーク”」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。
———，2014e「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに― 3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 24 号（通巻 253 号）。
———，2014f「A. メルッチの「創造力と驚嘆する力」をめぐって― 3.11 以降の惑星社会の諸問題に応

答するために⑴」『中央大学社会科学研究所年報』18号。
———，2015a「『3.11以降』の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“限界状況の想像／創造力”—矢澤修次郎，A.メルッチ，J.ガルトゥング，古城利明の問題提起に即して」『成城社会イノベーション研究』第10巻第1号。
———，2015b「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求⑵」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号（通巻258号）2015年。
———，2015c「“受難の深みからの対話”に向かって—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために⑵」『中央大学社会科学研究所年報』19号。
———（編著），2016a『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部。
———，2016b「惑星社会のフィールドワークにむけてのリフレクシヴな調査研究」新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部。
———，2016c「乱反射するリフレクション—実はそこに生まれつつあった創造力」新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部。
———，2016d「A.メルッチの“未発の社会運動”論をめぐって—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求⑶」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学26号（通巻263号）2016年3月。
———，2016e「『うごきの場に居合わせる』再考—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために⑶」『中央大学社会科学研究所年報』20号。
———，2016f「南欧と大西洋の島々のトランスナショナリズム」西原和久・樽本英樹編『現代人の国際社会学・入門—トランスナショナリズムという視点—』有斐閣。
———，2017a「A.メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み—“境界領域の智”への社会学的探求⑴」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号（通巻268号）。
———，2017b「“うごきの比較学”にむけて—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求⑴」『中央大学社会科学研究所年報』21号。
———，2017c「A.メルッチの“未発のリフレクション”—痛むひとの“臨場・臨床の智”と“限界状況の想像／創造力”」，pp. 105-141，矢澤修次郎編『再帰的＝反省社会学の地平』東信堂。
———，2018新原道信「“うごきの比較学”から見た国境地域—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求⑵」『中央大学社会科学研究所年報』22号。
———（編著），2019a『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部。
———，2019b「何をめざし，何を試みたのか—惑星社会と“臨場・臨床の智”」新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部。
———，2019c「イタリアの“国境地域／境界領域”から惑星社会を見る—ランペドゥーザとサンタ・マリア・ディ・ピサの“臨場・臨床の智”」新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部。
———，2019d「「同時代のこと」に応答する“臨場・臨床の智”—かたちを変えつつうごいていく“智”の工房」新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部。
———，2019e「コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワークの意味—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求⑶」『中央大学社会科学研究所年報』23号。
———（共編著），2020a『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部。
———，2020b「“惑星／地球／社会”の複合的諸問題への応答の試み—なぜいま社会科学を“惑星／地球／社会”から始める必要があるのか」新原道信他編『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部。
———，2020c「惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“臨場・臨床の智”に向けて—“惑星社会のフィールドワーク”は現代社会認識に寄与するのか」新原道信他編『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部。
———，2020d「願望のヨーロッパ・再考—「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク」『横浜市立大学論叢 社会

科学系列』71 巻 2 号。
———, 2020e「“惑星社会のフィールドワーク”の条件—惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(1)」『中央大学社会科学研究所年報』24 号。
———, 2021a「“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験—惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(2)」『中央大学社会科学研究所年報』25 号。
———, 2021b「移動民の側から世界を見る—「周辺」としていた土地や人を理解するためのフィールドワーク」中坂恵美子・池田賢市編『人の移動とエスニシティ』明石書店。
———（編著）, 2022a『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房。
———, 2022b「フィールドワークとは何か—地球の裏側へのはるかな旅／足元へのこれまたはるかな旅から」新原道信編『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房。
———, 2022c「こだわり，出会い，すくいとり，うごいていく—人間と社会のうごきをとらえるフィールドワークへ」新原道信編『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房。
———, 2022d「フィールドワークの“想像／創造力”—惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”(3)」『中央大学社会科学研究所年報』26 号。
Niihara, Michinobu, 1989a, “Sardegna e Okinawa: Considerazioni comparative fra due sviluppi insulari,” in *Quaderni bolotanesi,* n. 15.
———, 1989b, “Alcune considerazioni sulla vita quotidiana e sul processo dello sviluppo. Confronto fra due processi: Giappone-Okinawa e Italia-Sardegna,” in *Il grandevetro*, n. 102.
———, 1992, “Un tentativo di ragionare sulla teoria dell'insularità. Considerazioni sociologiche sulle realtà della società composita e complessa: Sardegna e Giappone,” in *Quaderni bolotanesi*, n. 18.
———, 1994, “Un itinerario nel Mediterraneo per riscoprire il Giappone e i giapponesi, Isole a confronto: Giappone e Sardegna,” in *Quaderni bolotanesi*, n. 20.
———, 1995, “Gli occhi dell'oloturia.”Mediterraneo insulare e Giappone,” in *Civiltà del Mar*e, anno V, n. 6.
———, 1997, “Migrazione e formazione di minoranze: l'altro Giappone all'estero e gli'estranei' in Giappone. Comparazioni col caso sardo,” in *Quaderni bolotanesi,* n. 23.
———, 1998, “Difficoltà di costruire una società interculturale in Giappone,” in *BETA,* n. 3.
Niihara, Michinobu (con A. Touraine, Z. Bauman, a cura di L. Leonini), 2003, *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini.
———, 2011, “Crisi giapponese — Conseguente al disastro nucleare degli ultimi mesi”, nel *Seminario della Scuola di Dottorato in Scienze Sociali*, Università degli Studi di Sassari.
———, 2012, “Il disastro nucleare di FUKUSHIMA. Scelte energetiche, società cvile, qualitàdella vita”, nel *Quarto seminario FOIST su Esperienze internazionali nell'università*, Università degli Studi di Sassari.
———, 2021, “Il dialogo continua con Alberto Melucci: Il senso ci è dato nell'incontro”, in atti di *Seminario internazionale IL FUTURO È ADESSO: Dialogando oggi con Alberto Melucci*, Milano: Casa della cultura.
Novosseloff, Alexandra et F. Neisse, 2007, *Des murs entre les hommes*, Paris: Documentation française.（＝2017，児玉しおり訳『世界を分断する「壁」』原書房）
Parmegiani, Francesco e Michele Zanetti, 2007, *Basaglia. Una biografia*, Trieste: Lint（＝2016，鈴木鉄忠・大内紀彦訳『精神病院のない社会をめざして バザーリア伝』岩波書店）
Pigliaru, Antonio, 1975, *Il banditismo in Sardegna. La vendetta barbaricia*, Milano: Giuffré.
———, 1980, *Il rispetto dell'uomo*, Sassari: Iniziative Culturali.
———, 2006, *Il codice della vendetta barbaricina*, Nuoro: Il Maestrale.
———, 2008, *L'eredità di Gramsci e la cultura sarda*, Nuoro: Il Maestrale.
———, 2011, *Il soldino nell'anima. Antonio Pigliaru interroga Antonio Gramsci*, Cagliari: CUEC.
Pira, Michelangelo, 1978, *La rivolta dell'oggetto. Antropologia della Sardegna*, Milano: Giuffré.

———, 1981, *Paska devaddis*, Cagliari: Della Torre.

———, 1985, *Sardegna tra due lingue*, Cagliari: Edes.

Said, Edward W., 1994, *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures*, London: Vintage.（= 1998, 大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社）

Tora, Salvatore, 1994, *Gli anni di Ichnusa. La rivista di Antonio Pigliaru nella Sardegna della rinascita*, Pisa-Sassari, ETIESSE-Iniziative Culturali.

Vargiu, Andrea (and Stefano Chessa, Mariantonietta Cocco, Kelly Sharp), 2016, "The FOIST Laboratory: University Student Engagement and Community Empowerment Through Higher Education, Sardinia, Italy", in Rajesh Tandon, Budd Hall, Walter Lepore and Wafa Singh (eds.), *KNOWLEDGE AND ENGAGEMENT. Building Capacity for the Next Generation of Community Based Researchers*, New Delhi: UNESCO Chair in Community Based Research & Social Responsibility in Higher Education. Society for Participatory Research in Asia (PRIA).